千葉市うならすず遺跡

―墓地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2020

宗教法人 最福寺
千葉市教育委員会
株式会社イビソク

千葉市うならすず遺跡　―墓地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―
2020
宗教法人最福寺　千葉市教育委員会　株式会社イビソク

千葉市うならすず遺跡

―墓地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2020

宗教法人 最福寺
千葉市教育委員会
株式会社イビソク

例　　言

1．本書は、千葉市若葉区多部田町1175、1176－1の各一部における宗教法人最福寺の墓地造成事業に伴う発掘調査成果についての埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査から報告書作成に至る業務は、宗教法人最福寺・オリエントハウス㈱の委託を受け、千葉市教育委員会の指導のもと、株式会社イビソク千葉営業所が受託し実施した。
発掘調査は株式会社イビソク千葉営業所　小野、整理・報告書編集作業は青木・濱村が担当し、以下の期間実施した。
3．発掘調査期間：平成31年４月15日～令和元年５月11日
調査対象面積：200㎡
整理・編集作業：令和元年５月12日～令和２年６月５日
4．調査指導　西野雅人（千葉市埋蔵文化財調査センター）
調査担当者　井出祥子（千葉市埋蔵文化財調査センター）
調査機関　株式会社イビソク　支援調査員　小野麻人　調査補助員　島袋俊之
整理担当　青木　誠　濱村友美　堀江夏歩
調査参加者
柳谷利勝　石毛秀樹　福田忠雄　福田光子　高橋初枝　川端建雄　浜野多賀子　中村貞子
野地美保子　木下京子　池田幸子　野本紘子
整理参加者
鷺　玲子　丹羽　香　丹羽牧子　長谷川晶子　森山智晴　藪下賀代子　山田里美
5．本書は青木、濱村、堀江、小野が西野・井出の指導のもと分担して執筆を行った。
青木：第１章・第２章・第４章、井出：第１章第１節、堀江：第１章第２節、濱村：第２章、
小野：第２章、西野：第３章・第４章
縄文土器については斎藤弘道氏にご教示いただいた。
6．発掘調査時における写真撮影は小野が行い、遺物の写真撮影は横山　亮（オフィス・メガネ）が行った。
7．動物遺体（貝類）の同定・分析については千葉市埋蔵文化財調査センター　西野氏に依頼し玉稿を賜った。
8．出土遺物及び調査記録は、千葉市埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。
9．発掘調査の実施から本書の作成に至るまで、次の諸機関・諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。
（敬称略）
千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会、宗教法人最福寺、有限会社カワヒロ産業、斎藤弘道、
いずみ霊園

凡　　例

1．本書に掲載した遺構図などの標高は、千葉市公共座標点３級88－71(若葉区多部田町1492番地先)から調査区割り基準杭12Gc杭（33.141m）と12Gd杭（33.122m）に移設した海抜高からの標高を示す。方位は座標北を表している。
2．調査区は、任意に10m方眼を設定しており、公共基準点を基軸としている過去の調査区割りとは一致しない。
3．土層の色調は、農林水産省監修『新版標準土色帖』（2016年度版）を参考にしている。
4．遺構・遺物の縮尺は以下の通りである。
竪穴建物跡1/60、溝跡1/100、土坑1/40、炉1/30
土器大型品1/6、土器片・石製品・石鏃1/3
5．掲載遺物は通し番号を付し、本文・挿図・写真図版共に一致している。
6．本書挿図に使用したスクリーントーンは、各図版内に凡例を明記している。

本 文 目 次

例言・凡例・目次
第１章　うならすず遺跡調査の概要…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　うならすず遺跡の位置と歴史的環境…… 2
　第３節　調査の方法・調査の経過…… 4
　第４節　基本層序…… 6
第２章　検出した遺構と遺物…… 7
　第１節　縄文時代…… 7
　第２節　時期不明の遺構…… 15
　第３節　遺構外出土遺物…… 18
第３章　うならすず遺跡出土貝の分析…… 28
第４章　うならすず遺跡の調査成果　－ まとめに変えて － …… 29
写真図版・抄録

挿 図 目 次

第１図　調査地点・周辺遺跡分布図…… 1
第２図　周辺遺跡地図…… 3
第３図　調査地点と過去の調査位置図…… 4
第４図　全体図・グリッド配置図…… 5
第５図　基本層序…… 6
第６図　１号竪穴建物跡…… 7
第７図　17号遺構 …… 8
第８図　３・６・24・29・35～37号遺構 …… 11
第９図　38・43・47号遺構 …… 13
第10図　26・33号遺構 …… 15
第11図　27・28・31号遺構…… 16
第12図　30号遺構 …… 17
第13図　うならすず遺跡遺物組成 …… 18
第14図　出土遺物実測図１ …… 20
第15図　出土遺物実測図２ …… 21
第16図　出土遺物実測図３ …… 22
第17図　出土遺物実測図４ …… 23
第18図　出土遺物実測図５ …… 24
第19図　集落分布の変化 …… 31

表　目　次

第１表　１号竪穴建物跡の内部施設…… 8
第２表　遺物観察表…… 24
第３表　貝類種名…… 28
第４表　貝種組成…… 28
第５表　計測値分布　二枚貝殻長（㎝）…… 28

写 真 図 版 目 次

図版１　完掘全景（北東から）
　　完掘全景（北西から）
図版２　基本層序（南から）
　　１号竪穴建物跡完掘（西から）
図版３　17号遺構検出状況（西から）
　　17号遺構完掘（西から）
　　17号遺構断面（南西から）
　　６号遺構完掘（東から）
　　２・48号遺構完掘（北から）
　　７～11号遺構完掘（北西から）
　　37号遺構完掘（南から）
　　38号遺構土層断面（南西から）
図版４　38号遺構遺物出土状況（南西から）
　　47号遺構断面(北から）
　　26号遺構断面（南西から）
　　26号遺構完掘（西から）
　　33号遺構検出状況（西から）
　　33号遺構断面（東から）
　　28号遺構貝出土状況（東から）
　　包含層遺物出土状況（東から）
図版５　27・28・31号遺構完掘（東から）
　　30号遺構完掘（西から）
図版６　出土遺物１
図版７　出土遺物２
図版８　出土遺物３
図版９　出土遺物４

第１章　うならすず遺跡調査の概要

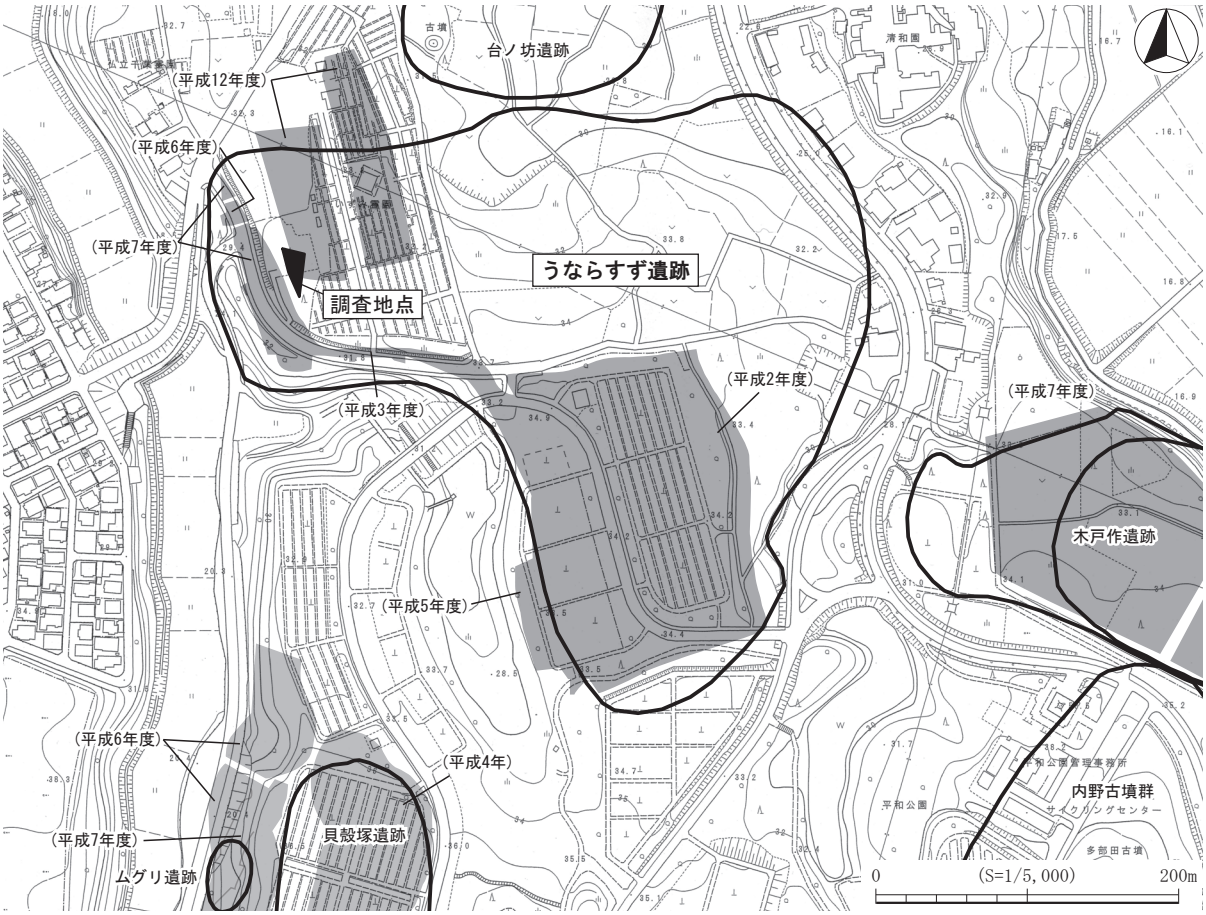
第１節　調査に至る経緯

平成 30 年 10 月 31 日付けで、宗教法人 最福寺（以下「事業者」という。）から、墓地造成を計画している千葉市若葉区多部田町 1168 － 1 外（面積 6,145.50㎡）について、「埋蔵文化財発掘の届出について」が千葉市教育委員会教育長あてに提出された。試掘の結果、竪穴建物跡等が検出されたため、同年 12 月 4 日付け 30 千教埋セ第 265 号にて、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

その後、平成 31 年 1 月 7 日付けで、事業者より「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、同年 1 月 15 日付け 30 千教埋セ第 360 号にて千葉県教育委員会教育長宛て報告し、同年 1 月 21 日～1 月 30 日の日程で千葉市埋蔵文化財調査センターが確認調査を実施した。

その結果、縄文時代竪穴建物跡などが検出されたため、同年 2 月 21 日付け 30 千教埋セ第 400 号にて、調査面積のうち 581㎡を本調査対象範囲として継続協議が必要の旨を事業者宛に通知した。

再度協議の結果、対象範囲のうち保護層が確保できず土木工事により埋蔵文化財に影響が生じる範囲 200㎡について、記録保存のための本調査を実施することとなった。同年 4 月 5 日付けで、事業者より「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、同年 4 月 5 日付け 31 千教埋セ第 42 号にて埋蔵文化財発掘の報告を行い、依頼者の委託を受けた株式会社イビソクの支援のもと、千葉市教育委員会が主体者となり、同年 4 月 15 日から発掘調査を開始した。



第１図　調査地点・周辺遺跡分布図

第２節　うならすず遺跡の位置と歴史的環境

（１）遺跡の立地

うならすず遺跡の所在する千葉県千葉市若葉区多部田町は、下総台地の南側に位置する。下総台地は千葉県北部一帯にまたがる広大な台地であり、それを村田川や鹿島川をはじめとする複数の小河川が浸食している。これらの河川によって開析された結果、海側には比較的起伏の少ない段丘の丘陵と、内陸側には比較的起伏の多い洪積台地の二つが下総台地には広がっている。

そんな下総台地を流れる河川の一つである都川は、千葉県のほぼ中央を東西に流れ東京湾へ注ぎ、うならすず遺跡はその中流域に位置する。都川の南岸には、開析する多部田支谷によって形作られる舌状の洪積台地が存在しており、本遺跡はその台地上に所在している。

この台地は、都川に面した北東側は緩やかな傾斜が見られ、南下するに従い多部田支谷に面する斜面は標高が高く急傾斜となり、最も高いところで標高約43mを測る。本遺跡はその北部東側、標高約30～35mほどに位置に所在している。

周囲からは縄文時代から中・近世に至るまでの遺跡が確認されている。その中でも、多部田貝塚・多部田遺跡・貝殻塚遺跡・ムグリ貝塚・木戸作遺跡・内野古墳群等の遺跡らは、総称して平和公園遺跡群と呼称されている。

（２）周辺の遺跡

旧石器時代の遺跡は乏しく、都川中流～上流に位置する芳賀輪遺跡からナイフ形石器と有舌尖頭器、下流に位置する城之腰遺跡からは、ナイフ形石器と尖頭器が出土しているのみにとどまる。

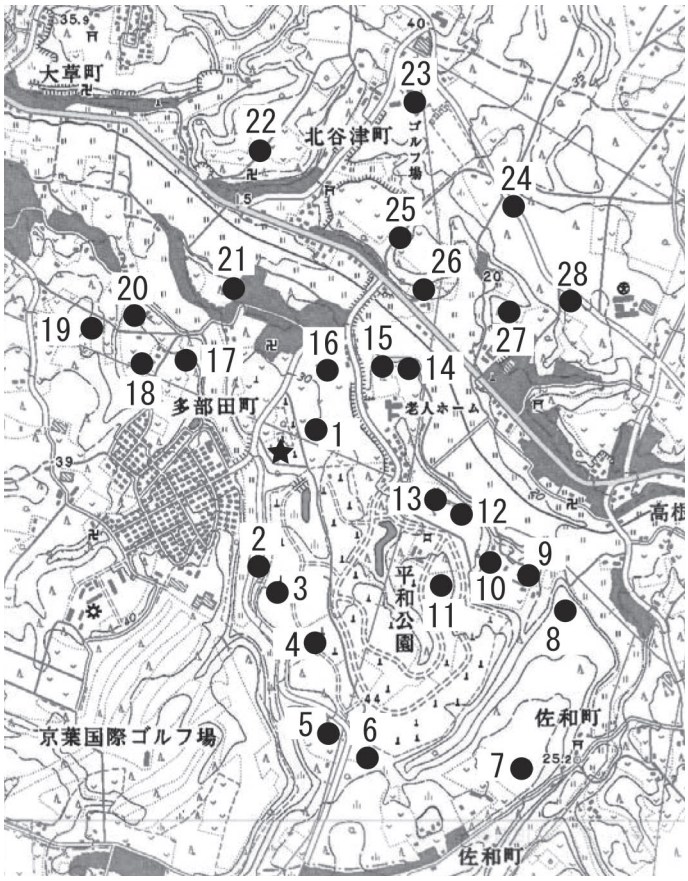
縄文時代の遺跡では、台地の南に貝殻塚遺跡(中期)と大規模馬蹄形貝塚である多部田貝塚(後期)が、北側には台ノ坊遺跡(中期)、西側には木戸作遺跡(縄文時代前期～平安時代)が確認されている。それ以外にも、多部田支谷を挟んだ対岸に中期の遺跡であるハサマ遺跡・大徳遺跡・喜平田遺跡の３カ所が確認され、また、都川を挟んだ対岸の北側には同じく縄文時代の遺跡である北谷津・上ノ台遺跡も所在している。

弥生時代の遺跡は、住居跡が８軒確認された木戸作遺跡が所在しているほか、台地から北西に位置する城之腰遺跡・星久喜遺跡・辺田遺跡にて比較的大規模な集落・墓域が検出されている。

古墳時代の遺跡としては、台地の南東に内野古墳群・内野北古墳群が存在しているが、墳丘が消滅してしまった古墳も複数存在する。

奈良時代～平安時代の遺跡には、台地の縁辺ではあるが、多部田支谷の東側斜面にムグリ遺跡が所在する。この遺跡からは、古墳時代後期と平安時代の住居跡１軒ずつが確認されたほか、奈良・平安時代の製鉄に関連する遺構も確認され、鍛冶遺構などの工房の存在が推測される。

この他の遺跡としては、北西に多部田城跡(戦国時代後期)が確認されているほか、都川を挟んだ対岸東の高根塚群と光連寺台遺跡、台地南側の麓に位置する台古墳群の合計三カ所の塚群が確認されている。



周辺遺跡一覧（★：今年度調査地）

1. うならすず遺跡
2. ムグリ遺跡
3. 貝殻塚遺跡
4. 多部田貝塚
5. 中峠野遺跡
6. 中峠野南遺跡
7. 台古墳群
8. 水門遺跡
9. 内野東遺跡
10. 内野遺跡
11. 内野古墳群
12. 内野北古墳群
13. 木戸作遺跡
14. 馬場前遺跡
15. 馬場前西遺跡
16. 台ノ坊遺跡
17. 大徳遺跡
18. ハサマ南遺跡
19. 喜平田遺跡
20. ハサマ遺跡
21. 多部田城跡
22. 岩入遺跡
23. 広遺跡
24. 光連寺台遺跡
25. 北谷津・上ノ台遺跡
26. 上ノ台下遺跡
27. 八石遺跡
28. 高根塚群

0 (S=1/2,500) 100m

第２図　周辺遺跡地図

（３）過去の調査歴

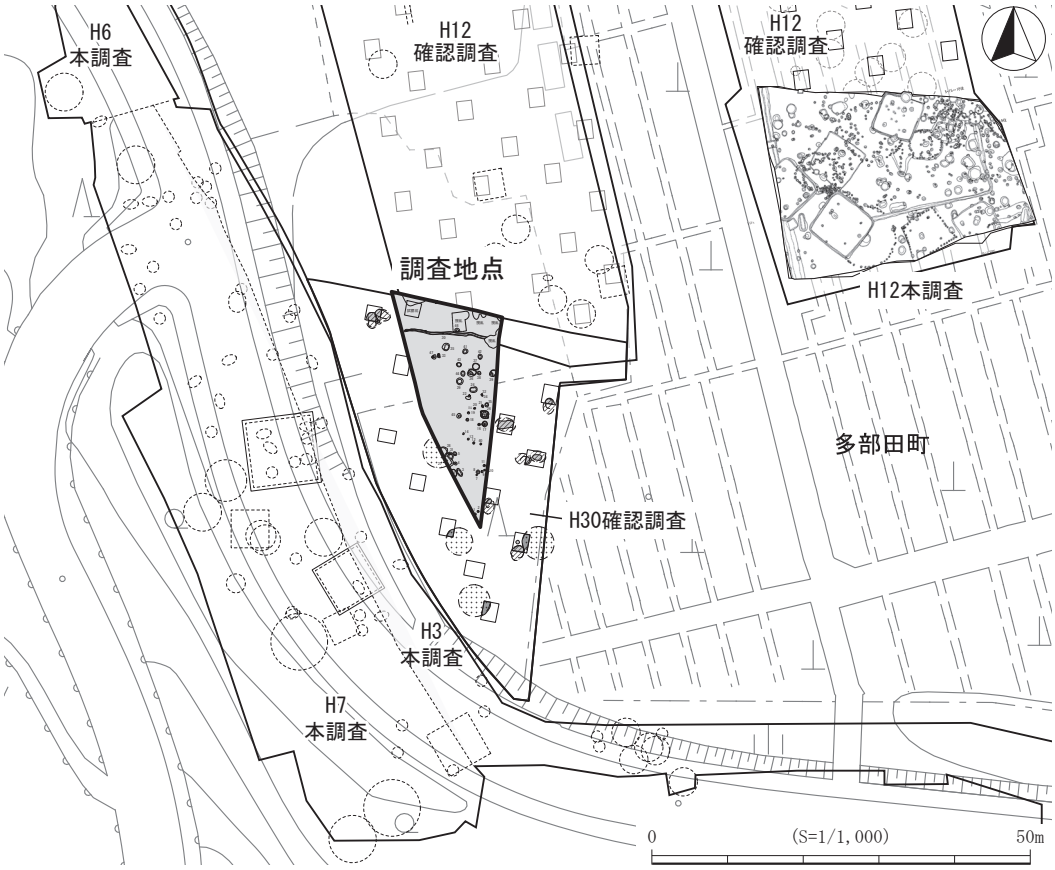
本遺跡では平成２・３・５・６・７・12年度に、合計６回の調査が行われている。

平成２～７年度の発掘調査では、縄文時代の住居跡60軒・土坑296基、古墳時代の住居跡７軒、平安時代の住居跡14軒・掘立柱建物跡６棟・土坑12基、古墳時代～平安時代の方形周溝状遺構２基、時期不詳の溝状遺構17条、その他近代の土坑・溝跡が検出され、縄文時代中期～後期・古墳時代・平安時代の集落跡が台地上に存在していたことが明らかになっている。

平成12年度に行われた発掘調査では、台地上に縄文時代の住居跡14軒以上・土坑36基、古墳時代の住居跡５軒・土坑２基、古墳時代～平安時代にかけての方形周溝状遺構２基、中世の土坑墓５基、土坑５基、近世の溝跡２条のほか、縄文時代あるいは中世と考えられるピットが多数検出されている。

出土した遺物はその８割が縄文土器であり、中でも中期末の加曽利ＥⅣ式～後期前葉の堀之内１式のものが主体を占めていた。

この調査では、５軒以上の住居跡が北東隅で重複しているのが確認されているほか、調査区北側の確認調査時にも、住居跡と同時期の遺物を複数確認している。このことから、調査区北側に限らず、周辺には同時期の住居群・集落が広がっており、うならすず遺跡だけでなく、付近の多部田貝塚を形成した縄文人の居住域や環境復元などの手掛かりとなりうる遺跡と考えられる。また、古墳時代から中世においては集落から墓域への変遷も窺え、当該地及び周辺地域には広範囲に複合遺跡の存在する可能性が高い。



第３図　調査地点と過去の調査位置図

第３節　調査の方法・調査の経過

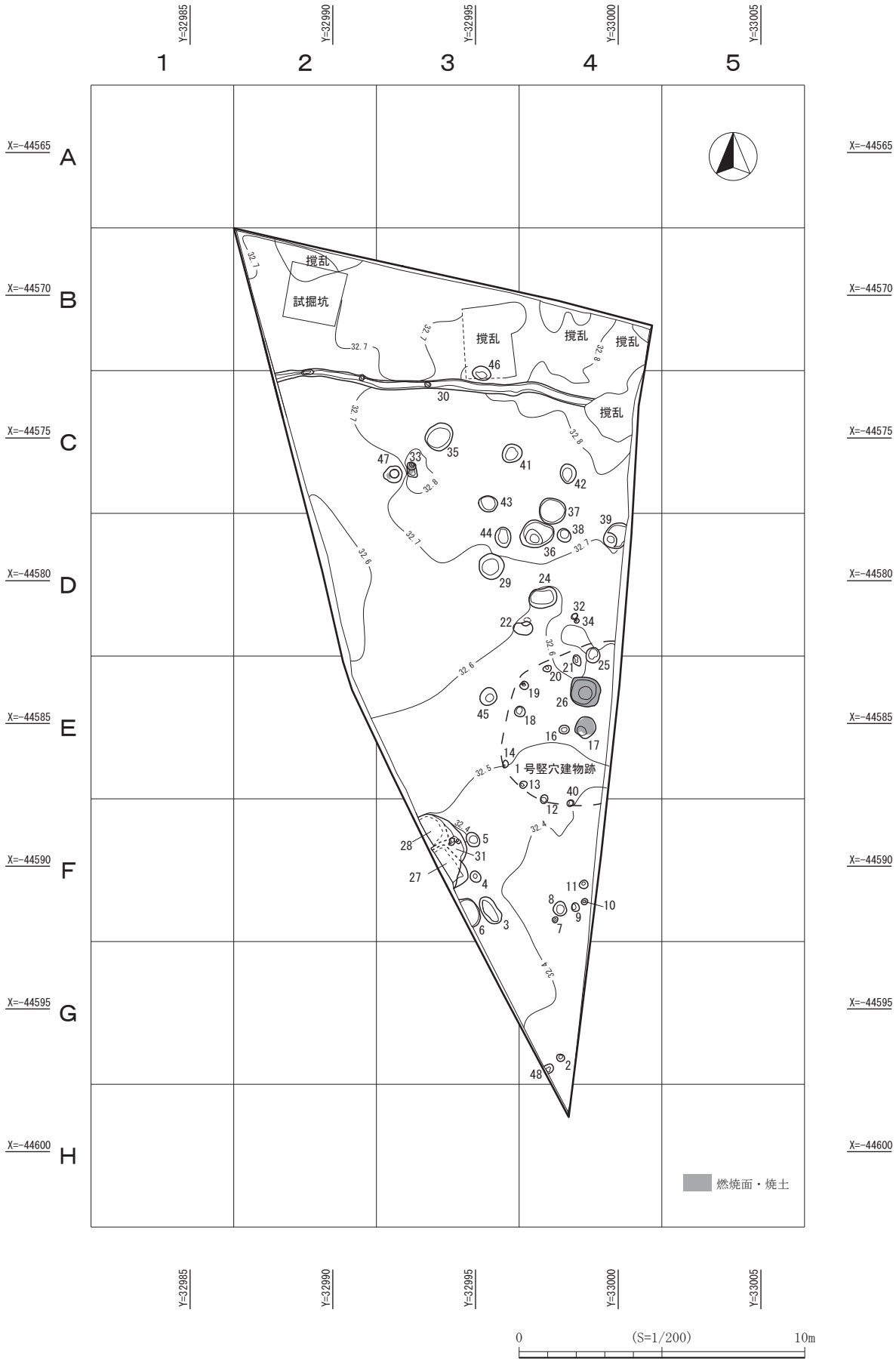
（１）調査の方法

調査区は現況が墓地に隣接していることと、斜面際に位置していることから基準点座標による設定ではなく、現況に合わせた設定を行った。そのためグリッドについても現況を優先して設定した。基準点はVRS・GPSを用いて設置し、現地での位置を杭によって明示した。グリッドは調査区北西隅を基点として５ｍ×５ｍの方眼を設定した。各グリッド名はＸ軸には北から南へＡ～Ｉのアルファベットを大文字で、Ｙ軸では１～６の算用数字を付することで、各遺構の位置や出土遺物を取り上げる基準とした（第４図）。

表土掘削は0.2㎥の重機により行い、その後に人力による遺構検出を実施した。人力掘削時の攪乱掘削・壁面掘削には剣先スコップを用い、遺構の検出には鋤簾、精査・掘削には移植ゴテを用いるなど適宜道具を選択して調査を進めた。

遺構調査では、掘り下げに際して竪穴建物跡・土坑・ピットには２分割法を用いた。なお、遺構からの出土遺物の取り上げは原位置での記録を基本として調査に臨んでいるが、その他の遺物は附随する施設ごとに適宜記録して取り上げている。包含層中の遺物については、Ⅱｂ層からⅢ層上面までの遺物をグリッドごとに取り上げを行った。

記録作業のうち、遺構の平面図・断面図の図化作業については手実測とトータルステーションを併用して行った。作図に当たっては、竪穴建物跡は1/20、土坑は1/20、カマドや炉跡は1/20の縮尺を用いた。写真撮影は遺構の検出状況・断面・遺物出土状況・完掘状況などを35mmモノクロ・カラーリバーサル、デジタルカメラ（2000万画素）等を用いて適宜実施した。



第４図　全体図・グリッド配置図

（２）調査の経過

平成 31 年４月 15 日準備工・基準点測量などと同時に発掘調査を開始。４月 16 日に重機による表土掘削及び人力掘削を開始した。

17 日から調査及び記録作業を実施し、５月 10 日に各遺構の全体写真撮影に向けた調査区内の清掃を開始し全体写真撮影を行った。

５月 10 日に基本層序観察のためのテストピット掘削を行い、５月 11 日発掘調査の記録作業を含めて全ての作業を完了。同日、埋め戻し・資機材の撤収を行い現状復旧をもって調査を完了した。

５月 13 日より整理作業を開始。

８月８日までに遺構図編集、遺物洗浄・注記・接合・復元を実施。

８月 19 日より実測・トレース・写真撮影、原稿執筆を行った。

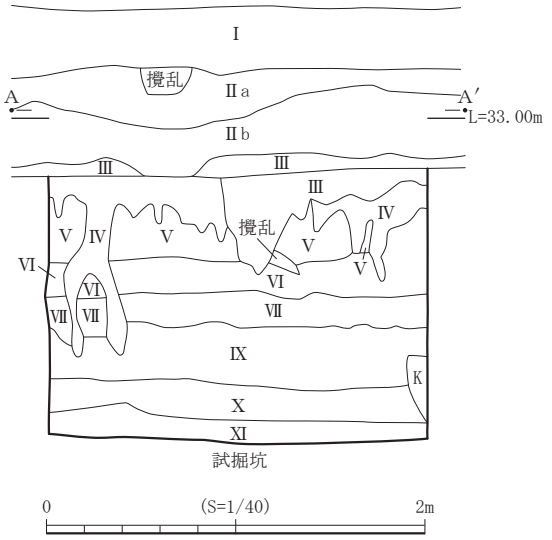
令和２年４月 28 日版組を作成し、千葉市教育委員会の校正を経て入稿。

６月５日報告書を刊行。

第４節　基本層序

本調査地点は台地縁辺部に位置している。基本層序の観察は、調査地点が狭小なこともあり調査区北壁に位置する試掘坑を利用して行った。

観察の結果、概ね関東ローム層の層序に合致するものであり、周辺遺跡の基本層と符合する。Ⅰ層は現代の表土・撹乱であり、撹乱は直前まで所在していた樹木の根撹乱などに伴うものである。Ⅱ層は根撹乱及び後世の影響によるためか明らかな遺構・遺物は認められなかった。Ⅲ層は本来縄文時代の遺構面及び包含層が広がっていたと思われるが、前述の根撹乱及び後世の影響によるものか、遺構の掘り方などが不明瞭な状況である。平成12年度のうならすず遺跡の調査でも同様の傾向が見られる。Ⅳ層はハードローム層であるが締まりが脆弱であり、その要因は根撹乱によるものと推定されるが調査地点が台地縁辺部であることと関連は明らかではない。Ⅴ層以下は関東ローム層の層序と同様の状況を観察することができた。以下は基本層序位置と断面図である。



基本層序
Ⅰ．　10YR４／４　褐色土　粘性なし　締りなし
Ⅱa．　10YR３／３　暗褐色土　粘性なし　締りなし
　　ローム粒、ロームブロック多量含む。
Ⅱb．　10YR３／３　暗褐色土　粘性なし　締りなし
　　ローム粒中量、ロームブロック少量含む。
　　撹拌されているがⅡd層に相当すると思われる。
Ⅲ．　10YR４／６　褐色土　径１～５㎝以内のロームブロック微量含む。
Ⅳ．　10YR４／６　褐色土　赤色・黒色スコリア微量含む。
　　上からの浸食が著しくハードロームの様相を呈していない。
Ⅴ．　10YR４／６　褐色土　赤色・黒色スコリアごく微量含む。
Ⅵ．　10YR４／４　褐色土　橙色スコリア微量含む。
Ⅶ．　10YR４／４　褐色土　径0.5㎝以内の黒色・赤色スコリア微量含む。
　　BBⅡ上面。
Ⅸ．　10YR４／４　褐色土　径0.5㎝以内の橙色・黒色スコリア微量含む。
　　BBⅡ下面。粘性有。
Ⅹ．　10YR３／４　暗褐色土　橙色スコリア微量含む。粘性有。
Ⅺ．　10YR４／４　褐色土　粘性有り。
基本層序の分層は関東ローム層に準じている。

第５図　基本層序

第２章　検出した遺構と遺物

第１節　縄文時代

（１）竪穴建物跡

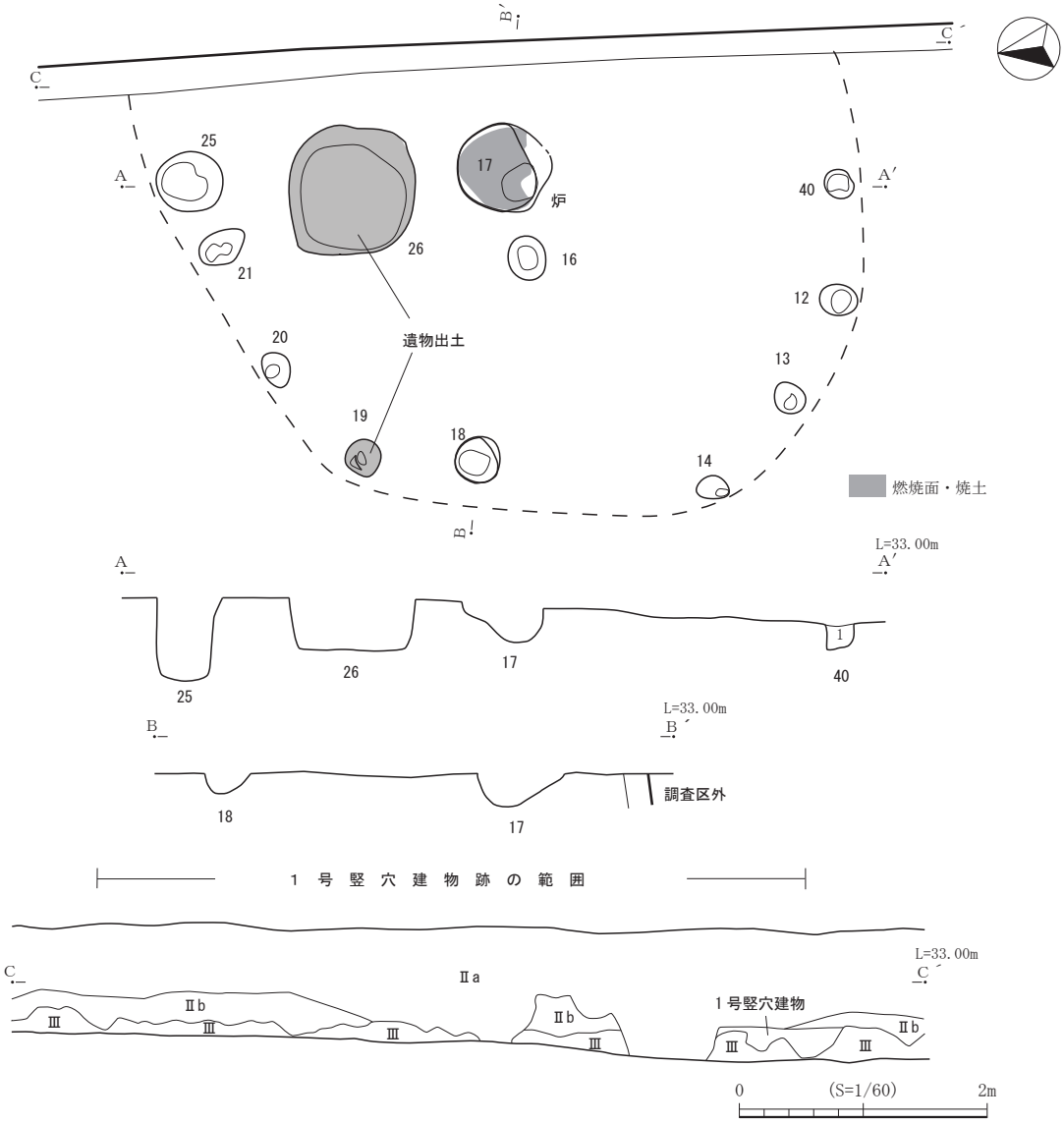
１号竪穴建物跡（炉：17号、柱穴：12～14・16・18～21・25・40号含む）

（第６・７・14図、図版２・３・６）

位置　調査区東側、Ｄ４、Ｅ３・４、Ｆ４グリッドに位置する。東半分が調査区外に延びている。

重複関係　北側に26号遺構が重複する。出土遺物の年代がほぼ同じであるため、新旧関係は不明である。覆土は明瞭に確認できず、26号遺構と共にローム層Ⅲ層上での検出である。

規模と形状　上面には近現代の根撹乱が深く入りこんでいたためⅢ層まで下げた段階で、17号遺構（炉）と半円形に並ぶピット群の配置により確認した。竪穴部の掘り方や床面は確認できなかった。ピット群の配置から壁際と推定され、平面形は楕円形と考えられる。規模は現状で長軸5.70m、短軸3.68m以上、軸方向はN-35°-Eを測る。



第６図　１号竪穴建物跡

第１表　１号竪穴建物跡の内部施設

数値の単位は（ｍ）

遺構番号	遺構種別	平面形	断面形	長軸×短軸×確認面からの深さ	確認面標高	底面標高	備考
17	炉	楕円形	逆台形	0.75×0.70×0.35	32.58	32.23	
12	柱穴 壁際	円形	U字形	直径0.24×0.55	32.44	31.89	
13	柱穴 壁際	楕円形	円筒形	0.25×0.20×0.50	32.47	31.97	
14	柱穴 壁際	楕円形	V字形	0.23×0.20×0.72	32.50	31.78	
18	柱穴 壁際	円形	皿形	0.36×0.34×0.20	32.58	32.38	
19	柱穴 壁際	円形	段形	直径0.28×0.47	32.57	32.10	称名寺1口縁
20	柱穴 壁際	楕円形	円筒形	0.26×0.20×0.49	32.61	32.12	
21	柱穴 壁際	楕円形	U字形	0.37×0.26×0.48	32.60	32.12	
25	柱穴 壁際	円形	円筒形	直径0.52×0.69	32.60	31.91	
40	柱穴 壁際	円形	円筒形	0.22×0.21×0.21	32.41	32.20	
16	柱穴	楕円形	円筒形	0.29×0.27×0.46	32.54	32.08	

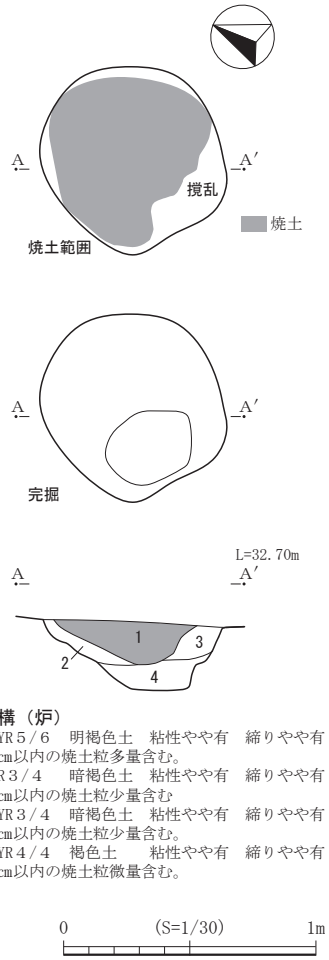
覆土　土層断面C-C´にみられるように、一部Ⅲ層まで達する根撹乱が深く入っており、明確な覆土は検出できなかった。ただし、調査区壁面で観察できるⅢ層直上に１号竪穴建物跡と思われる堆積土が観察されることから、床面及び竪穴の立ち上がりはⅢ層より上位の層に形成されていたものと推定される。

炉　中央に17号が確認された。平面形は楕円形で断面形は逆台形である。規模は長軸0.75m、短軸0.70m、深さ0.35mを測る。火床面はよく赤変し、厚さ約18㎝の焼土の堆積がみられる。全体的に根撹乱により軟質で特に南側は一部破壊されている。

柱穴・ピット　主に壁際に配置された10基の柱穴・ピットを確認した。中央の炉の西側に位置する16号遺構以外は、北－西－南にかけての建物壁際に半円形に並んでいる。ピット群の配置は楕円形で、直径0.22～0.52m、深さ0.20～0.72mを測る。主な柱穴同士の間隔は0.90～0.95mのものが多く、0.63～1.10mの規模の範疇に収まる。西側中央の14号遺構と18号遺構の間隔は約2.00mと他の柱穴間よりも広くなっており、ここが入口の可能性も考えられる。

遺物　１号竪穴建物跡の範囲内の遺物は、19号と26号から出土している。炉や大多数のピットでは出土遺物はみられず、19号遺構のみの出土であった。ここからは、称名寺１式の口縁部が１点（第14図１）出土した。26号遺構からは加曽利ＥⅢ式から称名寺１式（第15図25～32）が出土している。

時期　出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭の加曽利ＥⅢ式から称名寺１式期と推定される。



17号遺構（炉）
１．7.5YR５/６　明褐色土　粘性やや有　締りやや有
　径1㎝以内の焼土粒多量含む。
２．10YR３/４　暗褐色土　粘性やや有　締りやや有
　径1㎝以内の焼土粒少量含む
３．7.5YR３/４　暗褐色土　粘性やや有　締りやや有
　径1㎝以内の焼土粒少量含む。
４．7.5YR４/４　褐色土　粘性やや有　締りやや有
　径1㎝以内の焼土粒微量含む。

第７図　17号遺構

（２）土坑

３号遺構（第８・14図、図版６）

位置　調査区南西側、Ｆ３グリッドに位置する。

重複関係　―

規模と形状　平面形は不整楕円形、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.17m、短軸0.53m、深さ0.17m、軸方向はN-30°-Wを測る。

覆土　ロームブロックを含む暗褐色土を主体とする単層である。

遺物　後期前葉の土器15点、口縁部２点、胴部12点、底部１点が出土した。条線文の粗製土器主体であり、中期の土器の混入は見られない。このうち、条線文の粗製土器胴部１点（第14図２）を掲載した。

時期　出土遺物から、縄文時代後期前葉と推定される。

６号遺構（第８・14図、図版３・６）

位置　調査区南西側、Ｆ３グリッドに位置する。西半分が調査区外に延びる。

重複関係　―

規模と形状　平面形は楕円形、断面形は円筒形を呈する。規模は長軸1.08m、短軸0.48m以上、深さ0.87m、軸方向はN-26°-Wを測る。

覆土　２層に分けられる。径10㎝以内のロームブロックを含む暗褐色～黒褐色土が主体である。

遺物　後期初頭の称名寺１・２式を中心に、阿玉台式を含む中期の土器73点が出土した。内訳は、阿玉台式の把手が１点、加曽利ＥⅢ式の胴部が３点、称名寺１式の胴部が17点、称名寺２式の口縁部が３点、胴部が14点、把手が２点、後期の無文の口縁部が５点、条線文の粗製土器が３点、縄文の粗製土器が５点、その他胴部22点、底部１点である。このうち、阿玉台Ｉb式の把手１点（第14図３）、称名寺１式の胴部１点（第14図４）、称名寺２式の胴部１点（第14図５）、把手１点（第14図６）、口縁部１点（第14図７）の計５点を掲載した。

時期　出土遺物から、縄文時代中期末～後期初頭の称名寺１・２式期と推定される。

24号遺構（第８・14図、図版４・６）

位置　調査区東側、Ｄ４グリッドに位置する。

重複関係　―

規模と形状　平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。規模は長軸0.99m、短軸0.68m、深さ0.23m、軸方向はN-71°-Eを測る。

覆土　２層に分けられる。暗褐色土～褐色土が主体であり、２層は、ロームブロックを多量に含む。

遺物　中期末葉加曽利ＥⅣ式から後期初頭称名寺１式の土器５点が出土した。内訳は、口縁部が１点、胴部が３点、底部が１点である。このうち、称名寺１式の口縁部１点（第14図８）を掲載した。

時期　出土遺物から、縄文時代中期末～後期初頭と推定される。

29号遺構（第８・14図、図版６）

位置　調査区中央、Ｄ３グリッドに位置する。

重複関係　―

規模と形状　平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。底面は概ね平坦である。壁面は急傾斜で掘り込まれている。規模は長軸0.90m、短軸0.88m、深さ0.46m、軸方向はN-３°-Wを測る。

覆土　３層に分けられる。暗褐色土が主体であり、１、２層には少量の焼土や焼土粒、炭化物が含まれる。２層はロームブロックを多量に含むことから人為的な埋め土と思われる。

遺物　中期末葉加曽利ＥⅣ式から後期初頭称名寺１式を中心とする土器64点、不明土製品１点が出土した。内訳は、加曽利ＥⅢ式の口縁部が１点、胴部が３点、加曽利ＥⅣ式の口縁部が３点、胴部が６点、加曽利ＥⅣ新～称名寺１式の口縁部が３点、称名寺１式の口縁部が５点、胴部が１点、その他口縁部が１点、胴部が39点、底部が２点、不明土製品が１点である。このうち、加曽利ＥⅢ新式の口縁部１点（第14図９）、加曽利ＥⅣ新式の口縁部１点（第14図10）、称名寺１式の口縁部２点（第14図11・12）を掲載した。

時期　出土遺物から、縄文時代中期終末～後期初頭の加曽利ＥⅣ式～称名寺１式期と推定される。

35号遺構（第８・14図、図版６・９）

位置　調査区中央北側、Ｃ３グリッドに位置する。

重複関係　―

規模と形状　平面形は不整楕円形、断面形はⅢ状を呈する。規模は長軸1.00m、短軸0.92m、深さ0.23m、軸方向はN-55°-Eを測る。

覆土　３層に分けられる。暗褐色土が主体であり、１・３層は締りが弱いことから根撹乱などの後世による影響が伺われる。

遺物　後期初頭称名寺式を中心とする土器34点、石製品１点が出土した。内訳は、称名寺１式の胴部が１点、称名寺１～２式の胴部が４点、その他口縁部が１点、胴部が28点である。石製品は石棒である。このうち、称名寺１～２式の胴部１点（第14図13）、称名寺１式の胴部１点（第14図14）、石棒１点（図版９-86）を掲載した。

時期　出土遺物から、縄文時代後期初頭の称名寺１式期と推定される。

36号遺構（第８・14図、図版６）

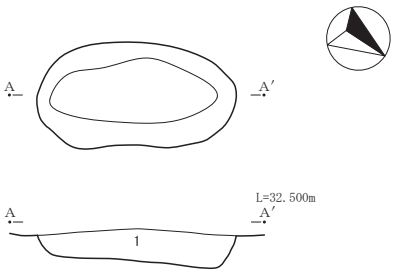
位置　調査区東側、Ｄ４グリッドに位置する。

重複関係　―

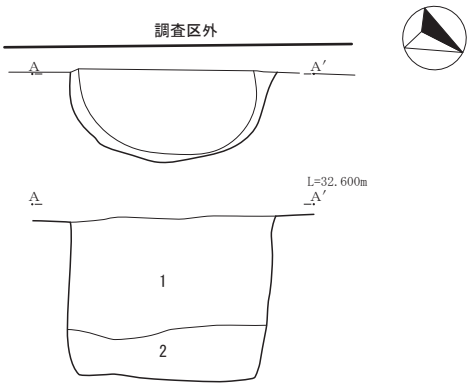
規模と形状　平面形は不整楕円形、断面形は不整形を呈する。規模は長軸1.13m、短軸0.91m、深さ0.35m、軸方向はN-74°-Eを測る。

覆土　４層に分けられる。粘性と締りはやや弱い黒褐色土が主体である。３層に遺物が多く含まれる。

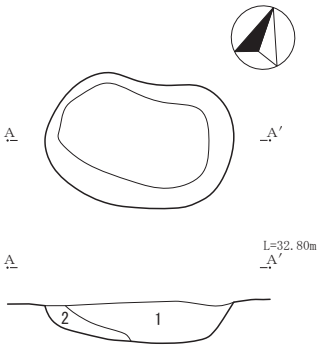
遺物　中期加曽利ＥⅣ式を中心とする土器89点が出土した。内訳は、加曽利ＥⅢ式の口縁部が１点、加曽利ＥⅣ式の口縁部が５点、胴部が６点、称名寺式の胴部が３点、加曽利Ｂ式～曽谷式の底部が１点、



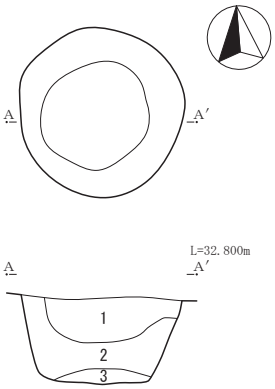
３号遺構
１．10YR３/３　暗褐色土　粘性やや有　締り有
　　5cm以内のロームブロック多量、焼土粒微量含む。



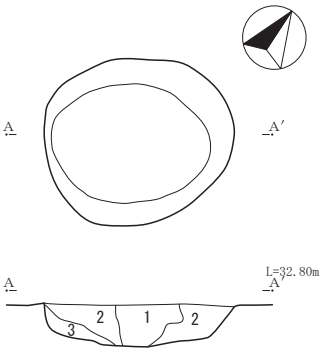
６号遺構
１．10YR３/３ 暗褐色土 粘性やや有 締りやや有 ローム粒多量含む。
２．10YR２/２ 黒褐色土 粘性やや有 締り有 径10cm以内のロームブロック少量含む。



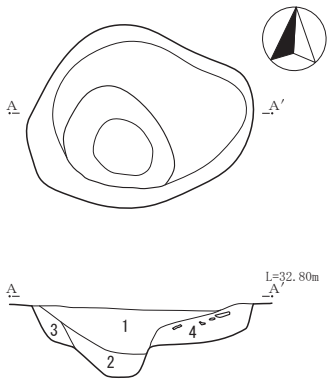
24号遺構
１．10YR３/４　暗褐色土　粘性有　締り有
　　径1cm以内のロームブロック、炭化物微量含む。
２．10YR４/４　褐色土　粘性有　締り有
　　径1cm以内のロームブロック、多量含む。



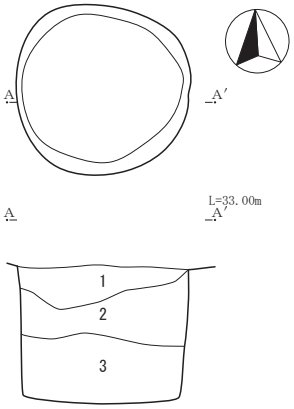
29号遺構
１．10YR３/３　暗褐色土　粘性やや有　締りやや有
　　ロームブロック少量、焼土粒、炭化物微量含む。
２．10YR３/４　暗褐色土　粘性有　締り有
　　径１cm以内のロームブロック多量、焼土、
　　炭化物少量含む。
３．10YR３/３　暗褐色土　粘性有　締り有
　　ローム粒少量含む。



35号遺構
１．10YR３/３ 暗褐色土 粘性有 締りやや有 径１cm以内の
　　ロームブロック少量、焼土粒、炭化物微量含む。
２．10YR３/４ 暗褐色土 粘性有 締り有 ローム粒少量含む。
３．10YR３/３ 暗褐色土 粘性有 締りなし ローム粒中量含む。



36号遺構
１．10YR３/２　黒褐色土　粘性やや有　締りやや有
　　ローム粒、ロームブロック（径0.5cm）少量含む。
２．10YR３/２　黒褐色土　粘性やや有　締りやや有
　　ローム粒、焼土粒微量含む。
３．10YR３/２　黒褐色土　粘性やや有　締りやや有
　　ローム粒中量含む。土器の主包含層。
４．10YR３/３　暗褐色土　粘性やや有　締りやや有
　　ローム粒多量含む。



37号遺構
１．10YR２/２ 黒褐色土 粘性やや有 締りやや有
　　径１cm以内のロームブロック微量含む。
２．10YR３/４ 暗褐色土 粘性有 締り有
　　ローム粒、径１cm以内のロームブロック中量、焼土粒微量含む。
３．10YR３/４ 暗褐色土 粘性有締り有
　　ローム粒、径１～２cm以内のロームブロック多量含む。

0　(S=1/40)　2m

第８図　３・６・24・29・35～37号遺構

その他口縁部が６点、胴部が62点、底部が５点である。このうち、加曽利ＥⅣ式の口縁部４点（第14図15～18）、堀之内１式と思われる胴部１点（第14図19）を掲載した。

時期　出土遺物は縄文時代中期末葉の加曽利ＥⅣ式が中心であるが、後期中葉～後葉の加曽利Ｂ式～曽谷式も含まれることから、縄文時代中期末葉～後期後葉と推定される。

37号遺構（第８・14図、図版３・6）

位置　調査区東側、Ｃ・Ｄ４グリッドに位置する。

重複関係　―

規模と形状　平面形は円形、断面形は円筒形を呈する。規模は長軸0.93m、短軸0.91m、深さ0.72m、軸方向はN-85°-Wを測る。

覆土　３層に分けられる。径１～２㎝以内のロームブロックを含む暗褐色～黒褐色土である。２層と３層はロームブロックを多量含むことから、人為的な埋戻し土の可能性がある。

遺物　中期末葉加曽利ＥⅢ式～後期初頭称名寺２式までの土器15点が出土した。内訳は、口縁部３点、胴部11点である。このうち、称名寺２式の口縁部１点（第14図20）を掲載した。

時期　出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭と推定される。

38号遺構（第９・15図、図版３・４・６）

位置　調査区中央東側、Ｄ４グリッドに位置する。

重複関係　―

規模と形状　平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸0.50m、短軸0.44m、深さ0.49m、軸方向は、N-45°-Wを測る。

覆土　２層に分けられる。ロームブロックを含む暗褐色～黒褐色土である。１層中より遺物が出土しているが、出土状況は据えられたような状況ではなかった。

遺物　中期末葉加曽利ＥⅣ式を中心に、一部加曽利ＥⅢ式を含む土器12点が出土した。内訳は、加曽利ＥⅢ式の胴部が２点、加曽利ＥⅣ式の口縁部が２点、胴部が２点、その他胴部が６点である。このうち、加曽利ＥⅣ式の深鉢口縁部２点（第15図21・22）を掲載した。

時期　出土遺物から、縄文時代中期末葉の加曽利ＥⅣ式期と推定される。

43号遺構（第９図）

位置　調査区中央北側、Ｃ３グリッドに位置する。

重複関係　―

規模と形状　平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。規模は長軸0.67m、短軸0.56m、深さ0.44m、軸方向はN-81°-Wを測る。

覆土　２層に分けられる。ロームブロックを少量含む暗褐色土～黒褐色土が主体である。

遺物　後期初頭称名寺１～２式の土器30点が出土した。内訳は、称名寺１式の胴部が３点、称名寺２式の胴部が２点、条線文の粗製土器口縁部が３点、その他の胴部が21点、底部が１点である。このうち、

称名寺１～２式の条線文の粗製土器口縁部１点（第15図23）を掲載した。

時期　出土遺物から、縄文時代後期初頭の称名寺１～２式期と推定される。

47号遺構（第９・15図、図版４・６）

位置　調査区中央北側、Ｃ３グリッドに位置する。

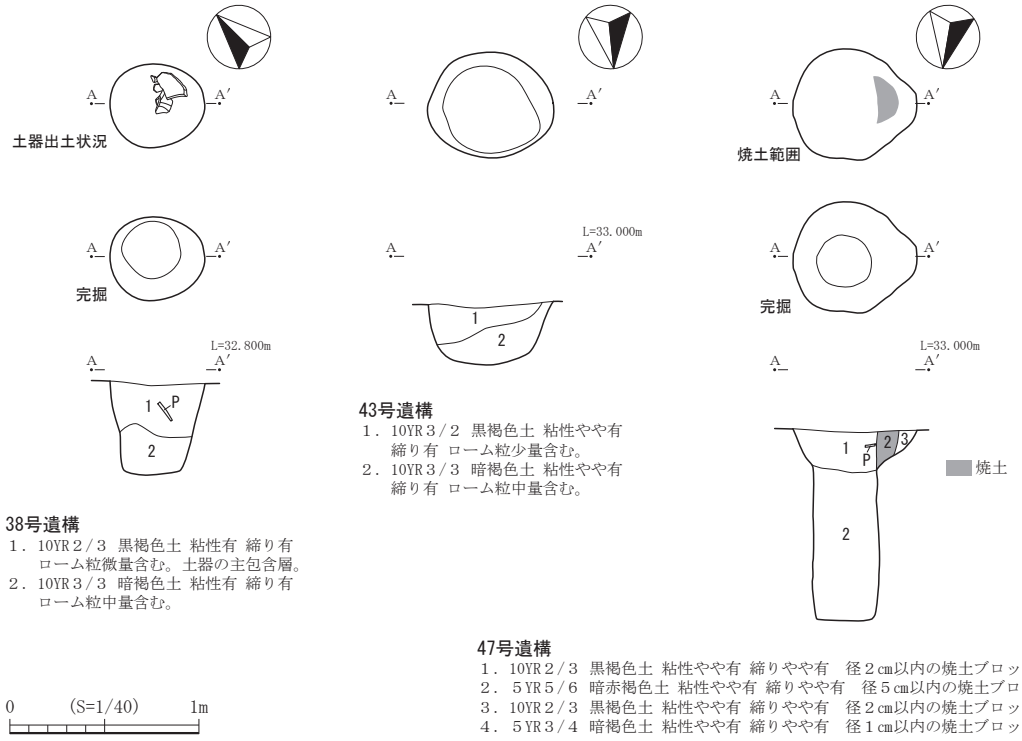
重複関係　―

規模と形状　平面形は不整楕円形、断面形は上半部が半円形、下半部が漏斗形を呈する。規模は長軸0.57m、短軸0.55m、深さ1.01m、軸方向はN-18°-Eを測る。遺構確認面では焼土塊が散布する状況が見られた。中層より下層にかけて直径0.35～0.40m、深さ0.80mの柱穴状の円形の掘り込みが確認され、壁面には被熱・硬化している部分がみられた。

覆土　３層に分けられる。１層は焼土ブロックを少量含む黒褐色土、３層は焼土ブロックを多量に含む暗褐色土である。３層とも根撹乱の影響で焼土ブロックが覆土中に混在する状況であり、締りも弱かった。

遺物　後期初頭称名寺１新式～後期前葉堀之内１式の土器45点が出土した。内訳は、称名寺１新式の口縁部１点、胴部３点、称名寺２式の口縁部１点、胴部３点、堀之内１式の口縁部１点、胴部３点、その他口縁部１点、胴部30点、底部２点である。このうち、堀之内１式の口縁部１点（第15図24）を掲載した。

時期　出土遺物から、縄文時代後期初頭～後期前葉の堀之内１式期と推定される。



第９図　38・43・47号遺構

（３）屋外炉

26号遺構（第10・15図、図版４・７）

位置　調査区東側、Ｅ４グリッドに位置する。

重複関係　１号竪穴建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。１号竪穴建物跡内での内部施設の可能性も考えられるが、１号竪穴建物跡の17号遺構（炉）と隣接していることから本稿では別遺構として報告する。

規模と形状　平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.20m、短軸1.07m、深さ0.43m、軸方向は、N-35°-Wを測る。中央部に直径0.47mの円形を呈し、底径0.18～0.21m、深さ0.49mを測る擂鉢状を呈する堆積（１層）が観察された。燃焼部と考えられるが、その形状から土器が据えられていた可能性もある。

覆土　５層に分けられ、黒褐色～暗褐色土が主体である。１層は燃焼部、２、３層は被熱部分、４～５層は埋め土と推測される。

遺物　中期末葉加曽利ＥⅢ式から後期初頭称名寺１式を中心とする土器97点、不明土製品１点が出土した。内訳は、加曽利ＥⅢ式の胴部が５点、加曽利ＥⅣ式の口縁部が12点、胴部が10点、加曽利ＥⅣ式～称名寺１式の口縁部が２点、称名寺１式の口縁部が５点、胴部が３点、その他口縁部が２点、胴部が54点、底部が３点、不明土製品が１点である。このうち、加曽利ＥⅢ式の要素を持つ加曽利ＥⅣ式の口縁部１点（第15図25）、加曽利ＥⅣ式の口縁部３点（第15図26～28）、称名寺１式の口縁部２点（第15図30・31）、胴部２点（第15図29・32）を掲載した。

時期　出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭の称名寺１式期と推定される。

33号遺構（第10・15図、図版４・７）

位置　調査区中央北側、Ｃ３グリッドに位置する。

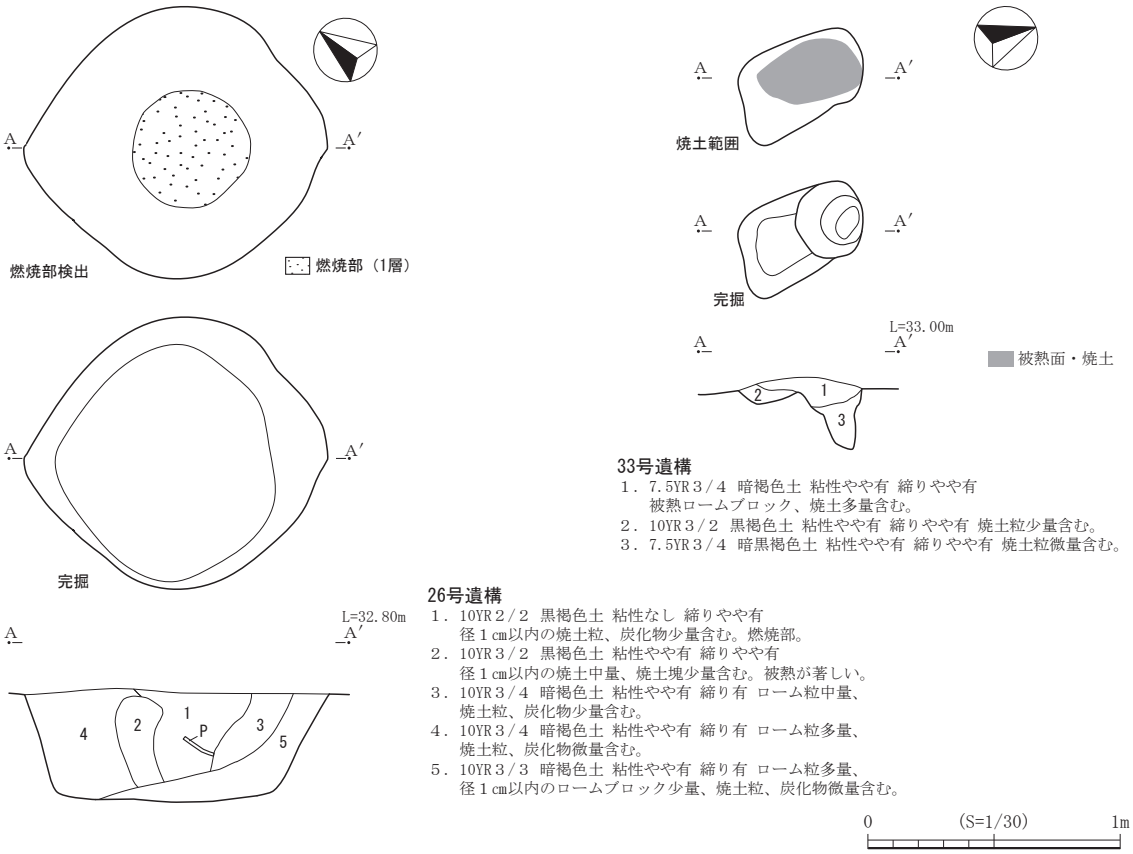
重複関係　―

規模と形状　平面形は不整楕円形、断面形は不整形を呈する。規模は長軸0.51m、短軸0.33m、深さ推定0.14m、軸方向はN-２°-Wを測る。北端に長軸0.19m、短軸0.15m、深さ0.28mの円筒状の掘り込みがあり、南側壁面の上部のみが被熱硬化が見られた。

覆土　２層に分けられる。１層は被熱ロームブロックと焼土を多量に含むが、後世の根撹乱により撹拌されている。

遺物　後期初頭称名寺１～２式の土器11点が出土した。内訳は、口縁部２点、胴部８点、底部１点である。このうち、称名寺１式の胴部１点（第15図34）、称名寺２式の口縁部１点（第15図33）を掲載した。

時期　出土遺物から縄文時代後期初頭の称名寺１～２式期と推定される。



第10図　26・33号遺構

第２節　時期不明の遺構

（１）土坑

27号遺構（第11・15図、図版５・７）

位置　調査区南西側、Ｆ３グリッドに位置する。西半分が調査区外に延びている。

重複関係　上面を31号遺構により掘り込まれる。北側上部は28号遺構とわずかに接しており、28号遺構より古い。

規模と形状　平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.55m以上、短軸0.66m以上、深さ0.90m、軸方向はN-33°-Wを測る。

覆土　２層に分けられる。暗褐色土～黒褐色土が主体であり、２層ともロームブロックを多量含むことから、人為的な埋め土とみられる。

遺物　早期稲荷台式と中期末葉加曽利ＥⅣ式～後期前葉称名寺１新式を主体とする土器34点が出土した。内訳は、早期稲荷台式の口縁部が１点、胴部が２点、加曽利ＥⅣ式の胴部が２点、称名寺１新式の胴部が３点、その他の胴部が25点、底部が１点である。このうち、称名寺１新式の胴部３点（第15図35～37）を掲載した。

時期　出土遺物は縄文時代中期末葉～後期前葉がみられるが、遺構の形状や隣接する28号遺構が古代以降と推定されること、掘り込みが他の縄文時代の遺構よりも深く堆積土の締まりも弱いことなどから古代以降と推定される。

28号遺構（第11・15図、図版５・７）

位置　調査区南西側、Ｆ３グリッドに位置する。西半分が調査区外に延びている。

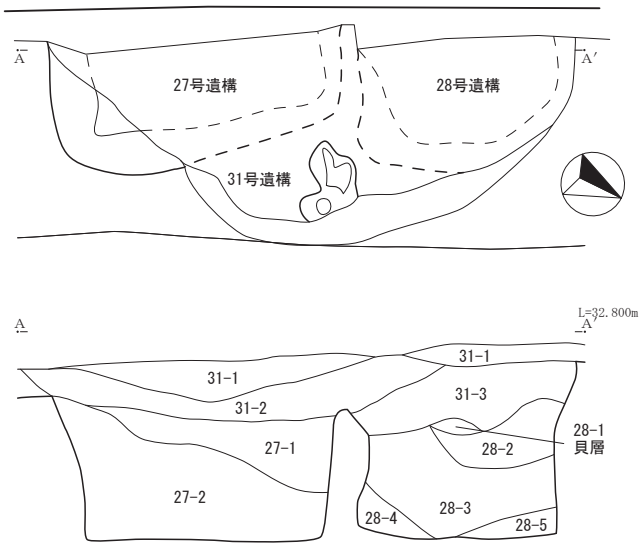
重複関係　上面を31号遺構により掘り込まれる。南側上部を28号遺構とわずかに接しており、27号遺構より新しい。

規模と形状　平面形は不整楕円形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.25m以上、短軸0.65m以上、深さ0.92m、軸方向は、N-35°-Wを測る。

覆土　５層に分けられ、暗褐色土～黒褐色土が主体である。１層中からは、幅30㎝、厚さ10㎝程の範囲に貝がまとまって出土した（貝の分析については第３章で報告）。２層は南側最上部を中心に焼土、焼土粒が含まれる。

遺物　縄文時代中期後葉加曽利ＥⅢ式～後期初頭称名寺２式の土器17点が主に出土した。内訳は、加曽利ＥⅢ式の胴部が２点、加曽利ＥⅣ式の胴部が１点、称名寺２式の胴部が２点、後期前葉の粗製土器の胴部が３点、底部が１点、後期中葉の粗製土器の胴部が２点、その他口縁部が１点、胴部が４点、底部が１点である。このうち、後期前葉の堀之内１式１点（第15図38）、後期中葉の胴部１点（第15図39）を掲載した。

時期　出土遺物は縄文時代中期後葉～後期中葉がみられるが、27号遺構より新しいこと、同じく遺構の形状や掘り込みが他の縄文時代遺構よりも深く堆積土の締まりも弱いことから古代以降と推定される。



27号遺構
１．10YR２/３　黒褐色土　粘性有　締り有　径１㎝以内のロームブロック含む、焼土粒、炭化物微量含む。
２．10YR３/４　暗褐色土　粘性有　締り有　径１㎝以内のロームブロック多量、炭化物微量含む。

28号遺構
１．10YR３/２　黒褐色土　粘性有　締り有　ローム粒中量含む。貝を多量に含む。
２．10YR３/４　暗褐色土　粘性有　締り有　ローム粒中量、焼土、焼土粒少量含む。
３．10YR３/３　暗褐色土　粘性有　締り有　径１㎝以内のロームブロック少量含む。
４．10YR２/３　黒褐色土　粘性有　締り有　径１㎝以内のロームブロック微量含む。
５．10YR２/３　黒褐色土　粘性有　締り有　径１㎝以内のロームブロック含む。

31号遺構
１．10YR３/２　暗褐色土　粘性やや有　締りやや有　径１㎝以内のロームブロック少量含む。
２．10YR３/４　暗褐色土　粘性やや有　締りやや有　径１㎝以内のロームブロック中量含む。
３．10YR４/４　褐色土　粘性やや有　締り有　径１㎝以内のロームブロック中量含む。

0　(S=1/40)　2m

第11図　27・28・31号遺構

（２）溝跡

30号遺構（第12図、図版５）

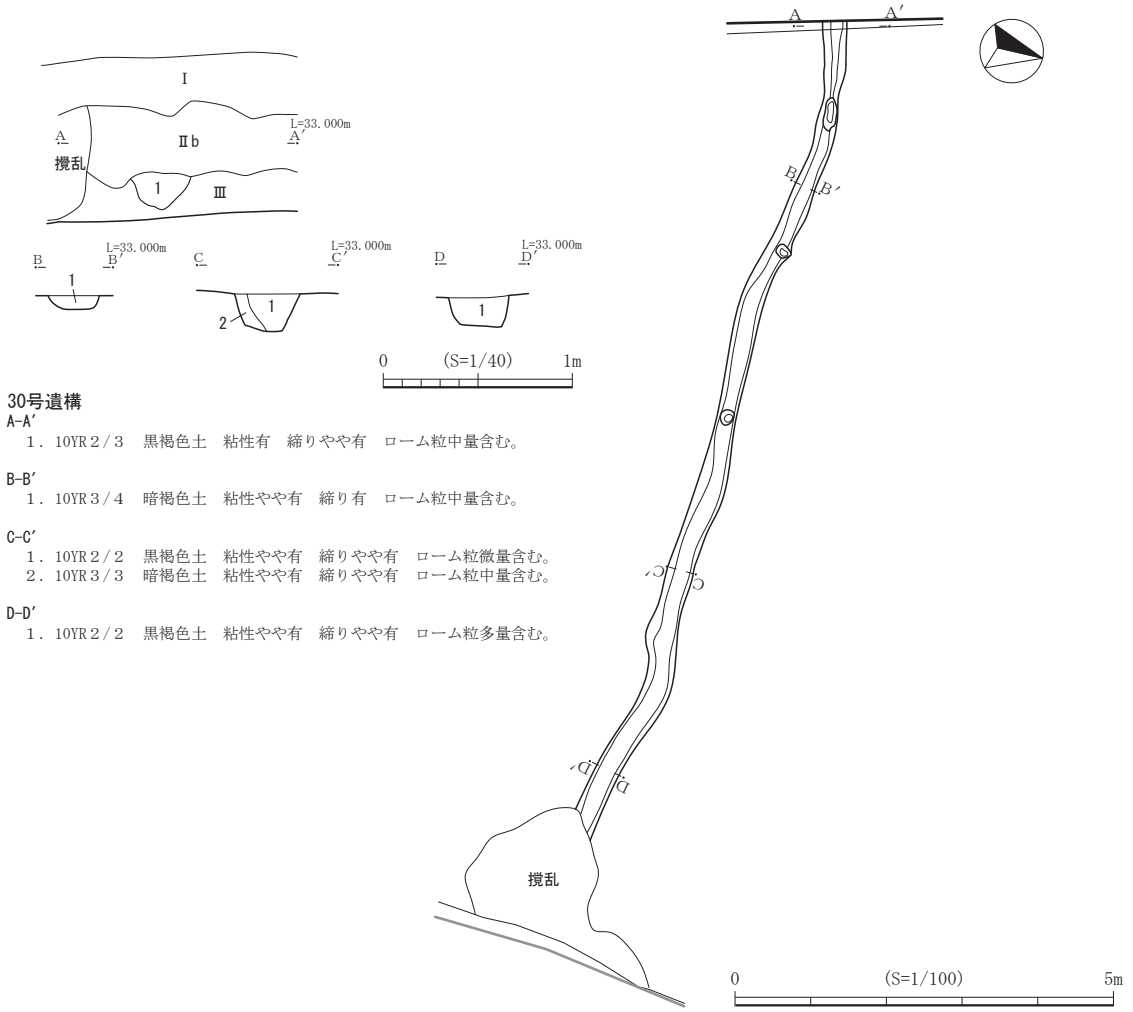
位置　調査区北側、Ｂ・Ｃ２、Ｃ３・４グリッドに位置する東西方向の溝である。東西両端とも調査区外に延びる。

重複関係　東端を撹乱により切られている。

規模と形状　東西方向の全長11.35m以上、上端部幅0.20～0.40m、底面幅0.16～0.27m、深さ0.17～0.30mを測る。軸方向は、N-83°-Wであり、やや蛇行する。断面はＵ字形を呈する。底面には凹凸が見られ、中には深さ10㎝程のピット状になるものも確認している。溝の東西両端の底面標高は、西が32.64㎝、東が32.65㎝、溝内は32.55～32.65mと概ね同レベルで推移している。

覆土　２層に分けられる。暗褐色土～黒褐色土が主体である。締りと粘性は弱い。ロームブロックは少量含まれているものの、底面に細砂などは観察されず、流水・滞水の痕跡は確認されなかった。

遺物　中期末葉加曽利ＥⅣ式～後期前葉堀之内１式の土器47点が出土した。内訳は、加曽利ＥⅣ式の口縁部が２点、称名寺２式の胴部が４点、堀之内１式の口縁部が７点、胴部が３点、その他の胴部が29点、底部が２点であるが、いずれも後世に混入したものと思われる。



第12図　30号遺構

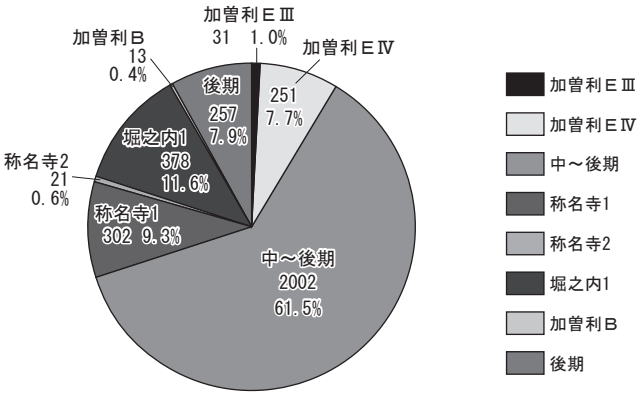
時期　出土遺物は縄文時代中期末葉～後期前葉であるが、縄文時代の包含層を掘り込んで構築されていること、覆土が締まりを欠くことから後世の遺構である可能性が考えられる。遺構の性格としては、区画・境界などの用途が考えられるが、縄文土器以外の遺物や杭跡・柱穴などが見つかっていないため、詳細は不明である。

第３節　遺構外出土遺物（第 15 ～ 18 図、図版７～９）

今回の調査では、Ｂ３・４、Ｃ２～４、Ｄ２・３グリッドに位置する遺物包含層から多くの遺物が出土している。この包含層は、基本層序中の主にⅡｂ（関東ロームⅡd）層に相当する。遺物の出土状況としては、広範囲に小破片が多く分布している様相が窺えた。

包含層より出土した遺物はほぼ縄文土器が占めており、部位別の内訳は口縁部279点、胴部1813点、底部92点、把手４点、土製品６点（円盤４点・土器片錘２点）、不明１点である。石器・石製品は５点出土しており（石鏃１・磨石１・凹石１・砥石１・磨斧１）である。このほか、時代は異なるがＣ４グリッドからは古墳時代から古代の土師器が２点出土している。包含層全体の出土割合としてはＣ３・４グリッドのものが総点数の90%を占める。

遺構を含む遺物については、斎藤弘道氏に特徴などの観察を依頼した。観察の結果、縄文土器は中期のものが少なく、称名寺式も混ざるものの中期～後期としたものも含めて堀之内１式の古手に属するものが圧倒的に多いという見解を頂き、それを基に第２表遺物観察表を作成した。遺構・遺構外を含む本調査の時期別の割合は、中～後期61.5%、後期7.9%、堀之内式11.6%、称名寺式9.3%、加曽利ＥⅣ式7.7%、加曽利ＥⅢ式1.0%、加曽利Ｂ式0.4%となる。また若干ではあるが、草創期の夏島式や井草式、早期の平坂式、中期後葉の加曽利ＥⅡ式や末葉のＥⅣ式、後期中葉の加曽利Ｂ３式～曽谷式などが認められるとのことであった。



第13図　うならすず遺跡遺物組成

包含層から出土した遺物については、斎藤氏との協議の上、以下について実測・掲載した。施文などの特徴については第２表を参照頂きたい。なお、22号出土遺物については遺構図を掲載していないが、堀之内式胴部１点(第15図40)のみ掲載している。

掲載遺物は、グリッドごとに図示している。

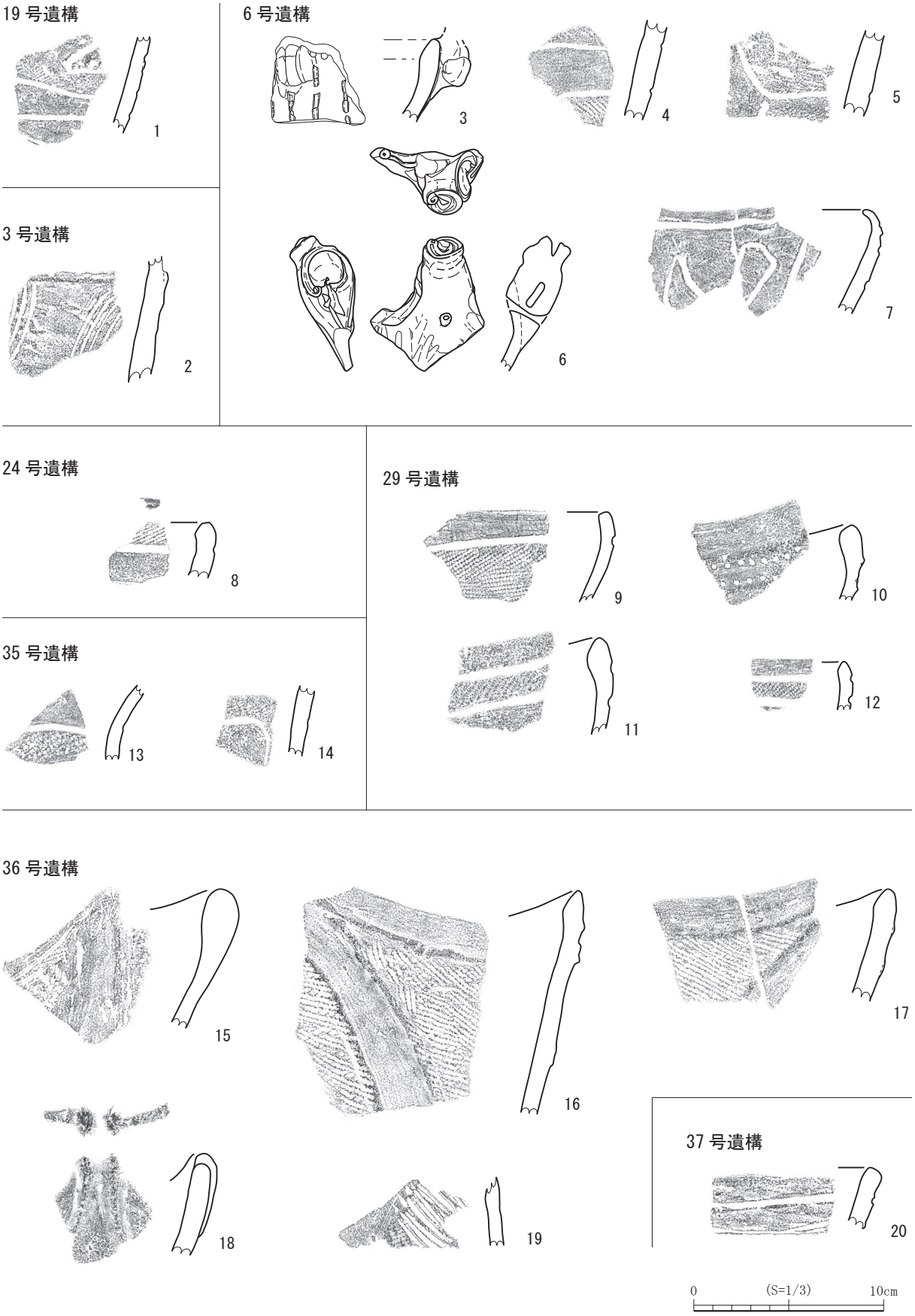
Ｂ３グリッドからは加曽利ＥⅢ式口縁部１点(41)、堀之内１式蓋付口縁部１点(42)の２点、Ｂ４グリッ

ドからは加曽利ＥⅢ式新の口縁部１点(43)、加曽利ＥⅣ式胴部１点(44)、称名寺１式口縁部３点(45～47)、後期前葉の口縁部１点(48)の６点を掲載した。

Ｃ２グリッドからは堀之内１式口縁部１点(49)の１点、Ｃ３グリッドからは草創期井草式口縁部２点(50・59)、草創期夏島式胴部１点(63)、早期平坂式口縁部２点(60・61)、称名寺１式並行中津式の口縁部１点(62)、加曽利ＥⅢ式口縁部１点(51)、後期前葉の胴部１点(58)、称名寺１式古の口縁部１点(52)、称名寺式の補修孔の残る口縁部１点(54)、胴部１点(53)、堀之内１式口縁部１点(57)、胴部１点(55)、土偶脚部？１点(56)、分銅形の打製石斧１点(64)、無茎の抉りを有する石鏃１点(65)の16点、Ｃ４グリッドからは草創期井草式口縁部１点(78)、加曽利ＥⅢ式古の口縁部１点(66)、加曽利ＥⅣ式の突起を有する口縁部１点(67)、称名寺１式の口縁部２点(68・69)、底部１点(70)、称名寺２式並行綱取式の口縁部２点(76・77)、堀之内１式の口縁部４点(71～73・75)、突起を有する口縁部１点(74)、墨書のある土師器坏１点(79)、土師器甕底部１点(80)、砥石１点(81)の16点を掲載した。このほか、磨石１点(図版９・86)、凹石１点(図版９・87)、磨斧の基部１点(図版９・89)の３点については写真のみ掲載している。

Ｄ２グリッドから早期稲荷台式胴部１点(82)、Ｄ３グリッドから加曽利ＥⅢ～ＥⅣ式期の土器片錘１点(83)、加曽利ＥⅣ式の口縁部１点(84)を掲載している。

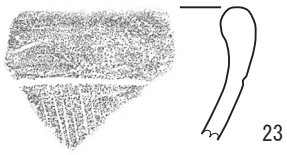
包含層調査状況



第14図　出土遺物実測図 1

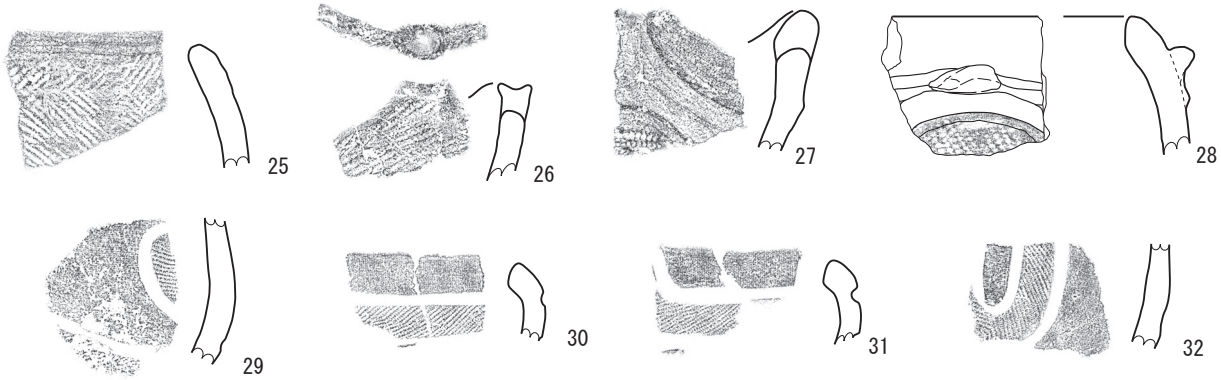
38 号遺構

43 号遺構



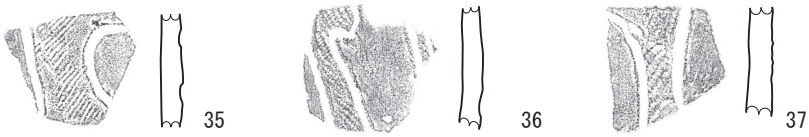
47 号遺構

26 号遺構

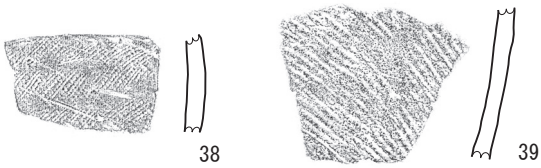


33 号遺構

27 号遺構



28 号遺構



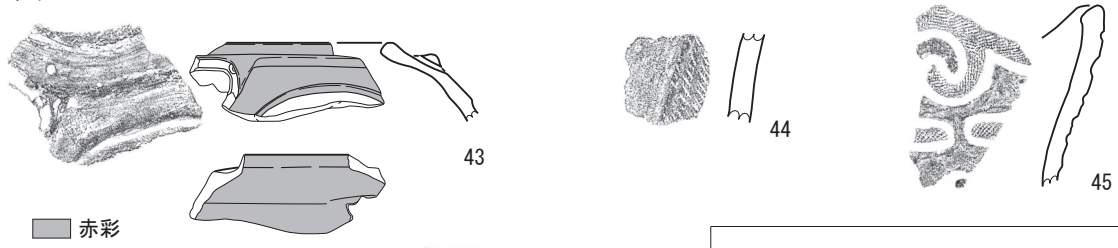
22 号遺構

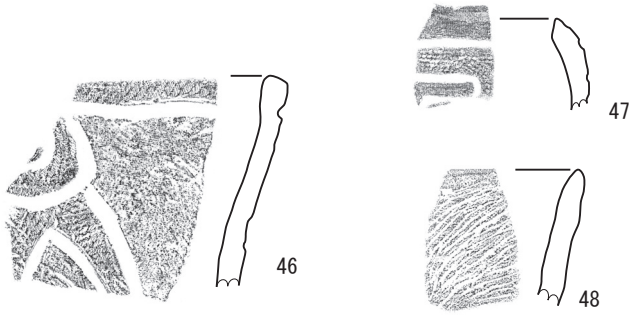
0 (S=1/3) 10cm

第15図　出土遺物実測図２

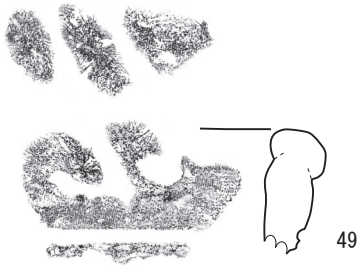
B3 グリッド

B4 グリッド



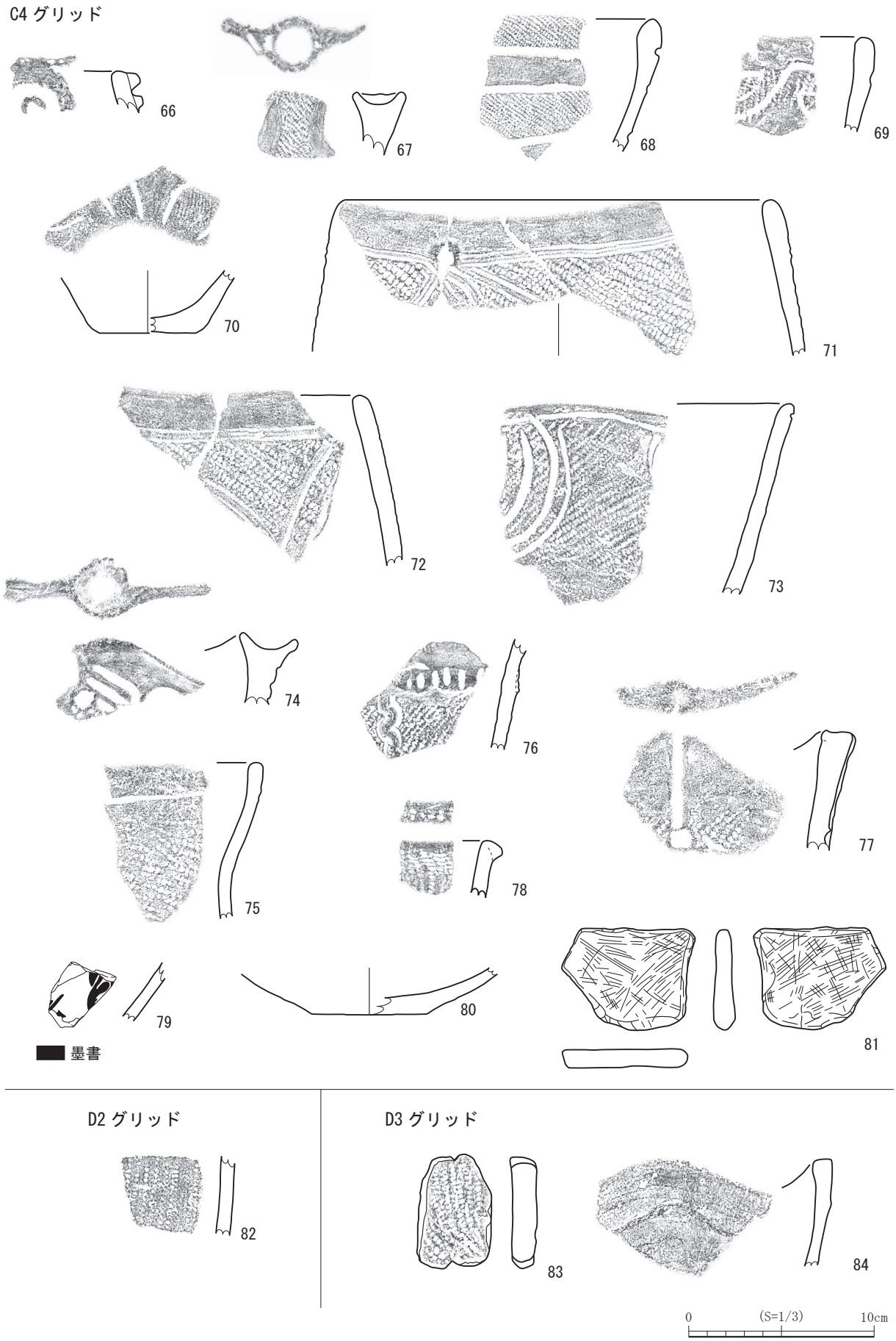


C2 グリッド



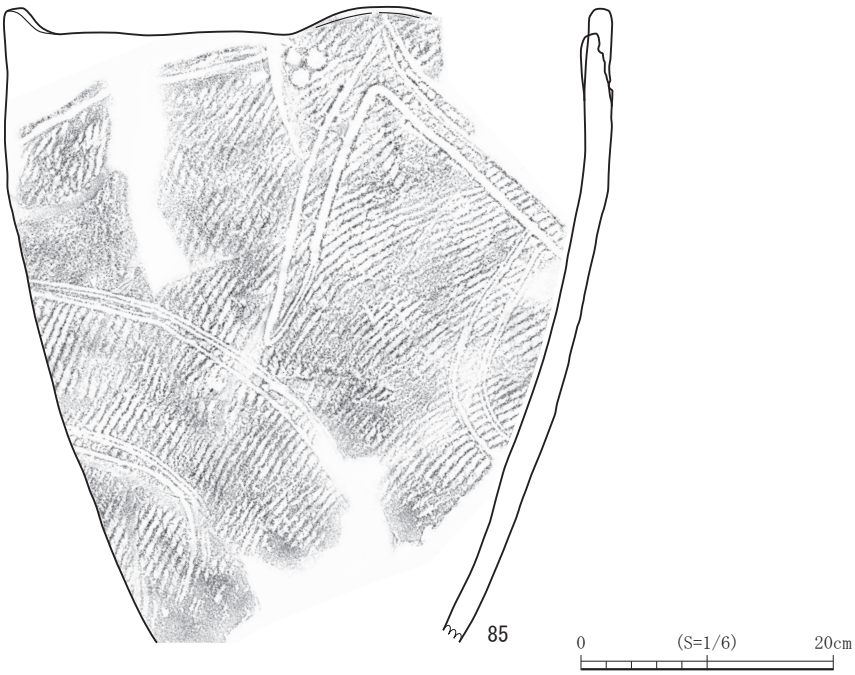
C3 グリッド

第16図　出土遺物実測図３



第17図　出土遺物実測図４

6 トレンチ



第18図　出土遺物実測図５

第２表　遺物観察表　　縄文土器

掲載番号	出土位置	種類器種	部位	口径 底径 器高	部位・残存率・製作技法・その他特徴	色調 外面/内面	胎土	焼成	時期	備考
1	19号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (5.1)	横走、斜走する沈線区画内に円形刺突を加えた貼付文を施す。区画外に単節縄文LRを横位回転で一部に施す。	にぶい黄橙 10YR7/4	密	良	称名寺1式	
2	3号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (6.7)	胴部上位に微隆起線文。５条一対の櫛描条線文を縦位に施す。	明褐 7.5YR5/6	粗	良	後期前葉	煤付着
3	6号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (4.6)	口縁部直下に貼付文を施し、縦位の竹管による押印文を施す。内面上位に稜を有する。	褐 7.5YR4/4	密	良	阿玉台Ib	
4	6号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (5.3)	横走する沈線間を磨り消し、区画内に単節縄文RLを横位回転で施す	にぶい黄褐 10YR4/3	密	良	称名寺1式	
5	6号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (4.6)	曲線的な沈線区画内に短沈線を施し、区画外は縦位のナデにより仕上げる。	にぶい赤褐 2.5YR5/4	密	良	称名寺2式	
6	6号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (7.1)	波状口縁部片。頂部に横位の穿孔を有し、上面に刺突を有する円文を施す。把手の下部に穿孔を有し、縦位の細い沈線文を施す。	橙 7.5YR6/6	密	良	称名寺2式	
7	6号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (5.5)	口縁直下に１条の沈線を廻らせ、以下に斜位の沈線文と曲線的モチーフを描く。口縁部は内湾する。	にぶい褐 7.5YR5/4	密	良	称名寺2式	
8	24号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (2.9)	口縁直下に単節縄文LRを横位回転で施し、以下に横走沈線文を廻らせ、磨り消す。口縁端部内面直下に稜を有する。	明褐 7.5YR5/6	密	良	称名寺1式	
9	29号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (4.7)	口縁部は内湾し、口縁部無文帯下に1条の沈線をめぐらし、以下に単節縄文LRを横位と斜位回転で施す。	暗赤灰 2.5YR3/1	密	良	加EⅢ式 (新)	
10	29号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (4.2)	波状口縁部片。口縁部は内湾し口縁部無文帯下に2条の断面三角形状の微隆帯を施し、微隆帯間に2段の刺突文列を施す。	にぶい黄褐 10YR5/4	密	良	加EⅣ式 (新)	
11	29号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (4.8)	波状口縁部片で口縁部は内湾する。口縁部無文帯下に2条の沈線をめぐらし沈線間に単節LR縄文を横位回転で施す。	明褐 7.5YR5/6	密	良	称名寺1式	
12	29号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (2.4)	内湾する口縁部片で、口縁部無文帯下に2条の沈線をめぐらし沈線間に単節LR縄文を横位回転で施す。	明褐 7.5YR5/6	密	良	称名寺1式	
13	35号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (3.6)	体部中位で括れ口縁部に向けて外反する。上位は無文帯となり、下位に単節縄文LRを横位回転で施し、1条の沈線で区画される。	にぶい赤褐 5YR4/4	密	良	称名寺1式	
14	35号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (3.8)	U字状の区画沈線を描き、区画外に単節縄文RLを横位回転で施す。	明褐 7.5YR5/6	密	良	称名寺1式	
15	36号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (7.3)	波状口縁部片。波頂部から2条単位の微隆起縄文が垂下される。無節縄文Rが横位回転で施される。その上に2条単位の半截竹管文による沈線文を加える。	明褐 7.5YR5/6	密	良	加EⅣ式	

掲載番号	出土位置	種類器種	部位	口径 底径 器高	部位・残存率・製作技法・その他特徴	色調 外面/内面	胎土	焼成	時期	備考
16	36号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (11.8)	波状口縁部片。口縁部無文帯を1条の断面三角形の隆帯で区画し、波頂部から2条単位の孤線文が同様の隆帯で描かれる。その後単節縄文LRが縦位と斜位回転で施される。口縁部内面に稜を有する。	明褐 7.5YR5/6	密	良	加EⅣ式	
17	36号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (5.9)	波状口縁部片。口縁部無文帯を1条の断面三角形の隆帯で区画し、波頂部から斜位の同様の微隆帯が描かれる。その後単節縄文LRが縦位回転で施される。口縁部内面に稜を有する。	明褐 7.5YR5/6	密	良	加EⅣ式	
18	36号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (5.3)	波状口縁部片。波頂部から2条単位の断面三角形の隆帯が垂下する。	にぶい黄褐 10YR5/4	密	良	加EⅣ式	
19	36号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (4.6)	破片上位を無文帯とし、単節縄文LRを横位回転で施し、その上に斜行沈線を密に施す。	明赤褐５ YR5/6	密	良	堀之内1式	
20	37号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (3.2)	口縁部に1条の太目の沈線をめぐらし以下にやや細目の沈線を施す。	暗褐 7.5YR3/4	密	良	称名寺2式	
21	38号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (6.4)	波状口縁部片。波頂部から1条の断面三角形の隆帯を垂下させる。破片左側には単節多条のRL縄文を縦位回転で施す。	暗褐 10YR3/4	密	良	加EⅣ式	
22	38号遺構	縄文土器 深鉢	口縁 ～胴部片	－ － (16.6)	波状口縁部片。口縁部無文帯を断面三角形の微隆帯1条で区画される。波頂部から弧状の微隆帯を施し、波底部から斜行する微隆帯を施す。地文として単節縄文LRを縦位回転で施す。一部を斜位回転で施す。口縁部内面に稜を有する。	明褐 7.5YR5/6	密	良	加EⅣ式	
23	43号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (5.3)	口縁部は内湾し口縁部無文帯下位に1条の沈線をめぐらし、以下に縦位の条線文を施す。	にぶい黄橙 10YR6/4	密	良	称名寺 1～2式	
24	47号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (2.2)	口縁直下に1条の沈線をめぐらし、以下に縦位の沈線文を施す。	橙 7.5YR6/6	密	良	堀之内1式	
25	26号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (4.9)	口縁部無文帯下に単節縄文LRを横位回転で1段施し、以下は縦位回転で施す。	褐 10YR4/4	密	良	加EⅣ式 （古）	1層出土
26	26号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (3.9)	波状口縁部片。波頂部の上面に凹みを加える。口唇部から口縁部にかけて単節縄文LRを横位回転で施す。	褐 7.5YR4/3	密	良	加EⅣ式	
27	26号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (5.6)	波状口縁部片。口縁部無文帯に断面三角形の微隆帯X字状のモチーフを描く。以下には同様の微隆帯による区画内に単節縄文LRを斜位回転で施す。	暗褐 10YR3/3	密	良	加EⅣ式	
28	26号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (5.5)	口縁部は内湾し、口縁部無文帯下に断面三角形の微隆帯による区画を施し、その中央部に舌状の隆帯を貼付する。以下に単節縄文	橙 7.5YR6/6	密	良	加EⅣ式	
29	26号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (5.8)	太い沈線による区画内に単節縄文LRを縦位と横位回転で施す。	にぶい赤褐 ５YR4/4	密	良	称名寺1式	
30	26号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (3.1)	口縁部無文帯下に１条の沈線を廻らせ、以下に単節縄文LRを横位回転で施す。口縁端部内面直下に稜を有する。	褐 7.5YR4/3	密	良	称名寺1式	
31	26号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (3.4)	口縁部無文帯に１条の太い沈線を廻らせ、一部を口唇部まで立ち上げる。以下に単節縄文LRを横位回転で施す。口縁端部内面直下に稜を有する。	褐 7.5YR4/4	密	良	称名寺1式	
32	26号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (4.2)	太い沈線によるU字状の区画内に単節縄文LRを斜位回転で施す。	黒褐 10YR3/2	密	良	称名寺1式	
33	33号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (2.3)	曲線的な沈線による区画内に単節縄文を施すが捻りの方向は不明	明赤褐 5YR5/8	密	良	称名寺1式	
34	33号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (3.5)	口縁部は歪み、小突起を付すかもしれない。口縁部無文帯下に1条の浅い沈線をめぐらす。	明赤褐 5YR5/6	密	良	称名寺2式	炭化物付着
35	27号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (4.4)	縦位と円形状の区画を施し、区画外に無節縄文Rを施す。	灰黄褐 10YR4/2	密	良	称名寺1式	
36	27号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (4.9)	端部が巻き込むJ字モチーフの区画内に単節縄文LRを縦位回転で施す。	にぶい褐 7.5YR5/4	密	良	称名寺1式	
37	27号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (4.4)	縦位の沈線区画内に単節縄文RL縦位回転で施す。	黒褐 2.5Y3/2	密	良	称名寺1式	
38	28号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (3.8)	横走する沈線文下に単節縄文LRを横位回転で施す。	灰オリーブ 5Y5/2	密	良	堀之内1式	
39	28号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (6.0)	単節縄文LRを縦位回転で施す。	にぶい黄褐 10YR5/3	密	良	後期前葉	
40	22号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (3.7)	単節縄文LRの横位回転の地文上に、半截竹管文による沈線文が廻る。	明赤褐 5YR5/6	密	良	堀之内1式	
41	B3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (4.1)	波状口縁を呈する。口縁部に低隆帯と太沈線による楕円形の区画を構成し、区画内に単節縄文RLを横位回転で施す。	にぶい黄褐 10YR5/4	密	良	加EⅢ式	
42	B3グリッド 表層	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (4.4)	口縁部直下に１条の沈線をめぐらし以下を無文帯として横位の磨きを施す。口縁部の内面に蓋受用の突帯がめぐる。	暗褐 10YR3/3	密	良	堀之内1式	

掲載番号	出土位置	種類器種	部位	口径 底径 器高	部位・残存率・製作技法・その他特徴	色調 外面/内面	胎土	焼成	時期	備考
43	B4グリッド	有孔鍔付土器	口縁部片	－ － (3.1)	口縁部は体部から内傾して立ちあがる。口縁部無文帯下に鍔がめぐり、鍔に孔を有する。以下に断面三角形の隆帯を弧状に施す。	褐 10YR4/4	密	良	加EⅢ式 (新)	内外面赤彩あり
44	B4グリッド	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (3.3)	垂下する断面三角形の微隆帯に沿って単節縄文LRを縦位回転で施す。	にぶい黄褐 10YR5/4	密	良	加EⅣ式	
45	B4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部 ～胴部片	－ － (7.2)	波状口縁を呈する。太い沈線でJ字状モチーフや横長楕円形文を描きモチーフ内に単節縄文LRを横位、斜位、縦位回転で施す。内面の上位に稜を有する。	黒褐 10YR3/2	密	良	称名寺1式	
46	B4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (8.4)	口縁部は体部から外傾して立ちあがり口唇部は平坦に作出され太い沈線で横位と弧状のモチーフを描き、区画内に無節Lの縄文を横位、斜位、縦位回転で施す。	灰黄褐 10YR4/2	密	良	称名寺1式	
47	B4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (3.7)	口縁部は体部から内湾して立ちあがり口唇部は内削ぎ状を呈する。口縁部無文帯下に横位、縦位の沈線文を描き、区画内に撚糸文Rを横位、斜位に施す。口縁部内面に稜を有する。	にぶい褐 7.5YR5/4	密	良	称名寺1式	内外面に赤彩か？
48	B4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (5.4)	口縁部は体部から外傾して立ちあがる。全面に斜位の条線文を施す。	黒褐 7.5YR3/1	密	良	後期前葉	
49	C2グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (4.9)	口縁部に棒状の粘土紐を斜位に貼りつけている。以下に１条の太い沈線をめぐらす。	明赤色 5YR5/6	密	良	堀之内1式	
50	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (3.4)	口縁部は体部から直立して立ちあがり口縁部は肥厚する。口縁部上面に１条の沈線を施し、外端部に単節縄文RLを斜位回転で施す。体部にも同じ縄文を施す。	にぶい赤褐 5YR4/3	密	良	井草1式	
51	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (4.0)	口縁直下から２条単位の垂下沈線を施し沈線間に単節縄文RLを縦位回転で施す。破片の左端には逆U字状のモチーフを描く。	明赤褐５ YR5/6	密	良	加EⅢ式	
52	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (6.5)	口縁部は体部から内湾して立ちあがる。口唇部は内削ぎ状に作出され、口唇部に縦位の刻み目を付す。口唇部をまたいで内面上位から外面の口縁部にかけて縦長の貼付文を施す。貼付文上および周囲には単節縄文LRを縦位、横位、斜位回転で施す。口縁部直下と貼付隆帯下に沈線区画による磨消帯を施す。口縁部内面に稜を有する。	橙 7.5YR7/6	密	良	称名寺1式 (古)	
53	C3グリッド	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (3.4)	横走する太い沈線文と横長楕円文のモチーフを描き、区画内に単節縄文RLを横位回転で施す。	明褐 7.5YR5/6	密	良	称名寺1式	
54	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (2.7)	口縁部無文帯下に１条の沈線をめぐらし以下に単節LR縄文を横位回転で施す。縄文施文部に焼成後の穿孔がみられる。	黒褐 7.5YR3/2	密	良	称名寺1式	補修孔あり
55	C3グリッド	縄文土器 注口土器	胴部片	－ － (4.9)	口辺部を無文帯とし、１条の貼付隆帯で区画する。体部に単節縄文RLを横位回転で施し、その上に弧状の沈線文を描き、端部に円形竹管文を付す。内面は丁寧なヨコナデを施す。	明褐 7.5YR5/6	密	良	堀之内1式	
56	C3グリッド 表層	縄文土器 蓋	胴部 ～底部片	－ － (1.1)	無文の底部から体部へかけて内傾して立ちあがる。	明赤褐 5YR5/6	密	良	堀之内1式	
57	C3グリッド 表層	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (7.4)	稜の波状紋を呈する口縁直下に円形の押圧痕を残し、以下に多截竹管による半円弧縄文を描く。内外面に赤彩痕を残す。	明赤褐 5YR5/6	密	良	堀之内1式	
58	C3グリッド	縄文土器 土器片錘	胴部片	－ － (3.2)	無文、土器片錘に加工される。	にぶい黄橙 10YR7/4	密	良	後期前葉	
59	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (3.5)	口縁部は体部から外反気味に立ちあがり、口唇部は肥厚する。口唇部上面は平坦に作出され、外端には単節縄文RLが斜位回転で施される。体部にRLが斜位回転で施される。	明赤褐 5YR5/6	密	良	井草式	
60	C3グリッド 表層	縄文土器 深鉢		－ － (3.6)	口縁部は体部から外反して立ちあがる。口唇部は平坦に作出される。無文で内外面とも横ナデが施される。	明黄褐 10YR6/6	密	良	平坂式	
61	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (5.9)	口縁部は体部から外傾して立ちあがる。無文。内外面ともヨコナデを施す。	褐 7.5YR4/4	密	良	平坂式	
62	C3グリッド	縄文土器 注口土器	口縁部片	－ － (4.1)	口唇部上面に１条の沈線をめぐらし、内面の上端に１条の沈線文を施す。外面の直下に１～２条の沈線をめぐらす。体部に単節縄文LRを横位、斜位、縦位回転で施しその上に太い沈線で曲線的モチーフを描く。	褐 7.5YR4/3	密	良	中津式	
63	C3グリッド	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (4.8)	粗い単節縄文RLを斜位回転で施す。	橙 7.5YR6/6	密	良	夏島式	
66	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (2.3)	口縁部に付帯隆帯に下る渦巻文が施される。	にぶい赤褐 5YR5/4	密	良	加EⅢ式 (古)	
67	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (3.45)	波状口縁の突起部片。外面に単節縄文LRを縦位回転で施す。突起部の上面は深く凹んでいる。	にぶい黄褐 10YR4/3	密	良	加EⅣ式	
68	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (7.2)	横走する沈線文間に単節縄文RLを横位回転で施す。内面の上位に稜を有する。	にぶい黄褐 10YR5/4	密	良	称名寺1式	
69	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (5.1)	口縁部無文帯を残し、以下に弧状の沈線で曲線的モチーフを描き、その上に単節縄文LRを斜位回転で施す。	暗褐 10YR3/3	密	良	称名寺1式	
70	C4グリッド	縄文土器 深鉢	胴部 ～底部片	－ (5.1) (3.4)	体部は平面から外傾して立ちあがる。体部下位に弧状の沈線文を描き、区画内に単節縄文LRを縦位、斜位回転で施す。	赤褐5YR4/6	密	良	称名寺1式	
71	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部 ～胴部片	(23.0) － (8.5)	口縁部は体部から内傾して立ちあがる。口縁部無文帯下に半截竹管による１条の沈線文をめぐらし、以下に粗い単節縄文RLを横位回転で施し、その上に斜位の沈線文を施す。	明赤色 5YR5/6	密	良	堀之内1式	

掲載番号	出土位置	種類 器種	部位	口径 底径 器高	部位・残存率・製作技法・その他特徴	色調 外面/内面	胎土	焼成	時期	備考
72	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (9.2)	口縁部は内傾しつつ立ちあがる。口縁部無文帯下に半裁竹管による１条の沈線文をめぐらし、体部に単節縄文RLを横位回転で施し、その上に斜位の沈線文を描く。	浅黄 2.5Y7/3	密	良	堀之内1式	
73	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (10.2)	口縁直下に１条の沈線をめぐらし、以下に単節縄文LRを横位回転で施し、その上に弧状の沈線文を描く。	明黄褐 10YR7/6	密	良	堀之内1式	煤付着
74	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (3.9)	波状口縁部片。口唇部は平たんに作出され波頂部の上面は深く凹められている。把手部には円孔を有し、横位の太い沈線文と円形刺突文が加えられている。	明褐 7.5YR5/6	密	良	堀之内1式	
75	C4グリッド	縄文土器 深鉢		－ － (8.4)	口縁部無文帯下に１条の沈線をめぐらす。体部に単節縄文RLを粗く横位回転で施す。	にぶい黄褐 10YR5/4	密	良	堀之内1式	
76	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (6.0)	口縁部無文帯下に１条の貼付隆帯をめぐらし、その上に刻みを加える。体部には単節LR縄文を横位回転で施し、半裁竹管による蛇行沈線文を描く。	にぶい赤褐 5YR5/3	密	良	綱取1式	
77	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (6.5)	波状口縁部片。口縁部無文帯に波頂部から１条の沈線が垂下する。波頂部の上面に凹みは付され、そこから垂下する沈線の下端のは円形の凹みが付されている。口縁部無文帯下に単節縄文LRが横位回転で施されている。縄文の下位には孤線文が付される。	黄褐 10YR5/6	密	良	綱取Ⅱ式	
78	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (3.1)	口縁部は体部から直立して立ちあがり口唇部は肥厚する。口唇部外端から口縁部にかけて単節縄文RLが斜位回転で施される。	にぶい褐 7.5YR5/4	密	良	井草式	
82	D2グリッド	縄文土器 深鉢	胴部片	－ － (4.3)	全面に単節縄文LRを粗い間隔で斜位回転で施す。	橙 7.5YR6/6	密	良	稲荷台式	
83	D3グリッド	縄文土器 土器片錘	胴部片	5.9 4.0 1.4	全体に単節縄文RLを斜位、横位回転で施す。上下端に切り込みを有する。	にぶい褐 7.5YR5/4	密	良	加EⅢ～Ⅳ式	
84	D3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	－ － (5.8)	波状口縁部片。口唇部は平坦に作出される。口縁部無文帯下に断面三角形の微隆帯が弧状に施される。	赤褐 5YR4/6	密	良	加EⅣ式	
85	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁 ～底部	(30.6) － (33.6)	口縁部は体部からやや内傾して立ちあがる。口縁部下に粗い単節縄文RLを横位回転で施し、その上に斜位の沈線文を施す。	明赤色 5YR5/6	密	良	堀之内1式	

土師器

掲載番号	出土位置	種類 器種	部位	口径 底径 器高	部位・残存率・製作技法・その他特徴	色調 外面/内面	胎土	焼成	時期	備考
79	C4グリッド	土師器 坏	胴部片	－ － (3.2)	水挽き整形。墨書の一部が体部外面にみられる。	にぶい橙 7.5YR7/4	密	良	古代 (9～10C代)	
80	C4グリッド 撹乱	土師器 壺	胴部～ 底部片	－ (6.1) (2.6)	平底から体部は外傾して立ちあがる。	明褐 7.5YR5/6	密	良	古墳時代 前～中期	

石製品

掲載番号	出土位置	種類 器種	計測値(cm)　()は推定値				部位・残存率・製作技法・その他特徴	石材	備考
			長さ	幅	厚さ	重さ(g)			
64	C3グリッド 表層	石器 打製石斧	(8.1)	(5.7)	(1.65)	97.5	小型打製石斧。下半の一部を欠く。分胴形打製石斧。表面は丁寧に調整されるが裏面は大きく自然面を残す。	粘板岩	
65	C3グリッド	石器 石鏃	3.45	2.2	0.6	3.47	無茎石鏃表裏面とも丁寧に剥離されている。	黒曜石	
81	C4グリッド	石器 砥石	(7.2)	(5.6)	1.2	64.1	表裏面とも丁寧に磨られ平滑となっている。	砂岩	
86	35号遺構	石棒 破片	－	－	－	181.3	表面は平滑に摩耗している。被熱痕あり。	安山岩	写真のみ
87	C4グリッド	石製品 磨石	－	－	－	296.2	半欠品。上下面および側面とも平滑に磨れれている。	流紋岩	写真のみ
88	C4グリッド	石製品 凹石	－	－	－	181.0	半欠品。表裏面と側面に平滑な磨り面がみられる。表面に凹みが明瞭にみられる。楕円形を呈する。	安山岩	写真のみ
89	C4グリッド	石器 磨製石斧	－	－	－	102.9	磨製石斧の基部片。表裏側面とも丁寧に磨かれている。	粘板岩	写真のみ

第３章　うならすず遺跡出土貝の分析

28号遺構の覆土上部で小規模な貝層を検出した（第11図）。遺構形態は縄文時代後期の小竪穴に似るが、第２章第２節の記載のとおり古代以降時期不明と判断されたが、貝類の分析結果からの所見を述べる。

分析対象・方法　貝層は、調査区境界に若干掛かっていたが、径30㎝、厚さ10㎝の混貝土層全量、18.5リットルを採取した。目の開き５㎜・2.5㎜・１㎜のフルイを使って水洗とフロテーションを行い、貝類は５㎜、2.5㎜メッシュに残ったものを抽出・集計した。巻貝は殻口下端を遺存するもの、二枚貝は蝶番の中央部分が遺存するものを１個とし、二枚貝は左右の多い方をもって最小個体数とした。計測は個体数の多い３種について行った。なお、フロテーションにより多数（204点）の微小貝を検出したが同定未了である。このほかＣ４区の縄文時代包含層でも約１リットルの保存の悪い貝類が取り上げられ、個体数はイボキサゴ72、シオフキ２であった。

分析結果　５科７種、同定個体数は356である（第３表）。貝種組成（第４表）は東京湾内湾干潟に多産したハマグリ・イボキサゴ・シオフキが大半を占め、その他も同一の海域で採取可能である。ハマグリが50.8％と過半を占め、イボキサゴの21.9％、シオフキの21.6％を加えた主要３種で94.4％となる。アサリ・アカニシ・オキシジミ・ツメタガイが混じるが数は少なく、構成種は少ない。ハマグリは平均53.8㎜・最大71.4㎜、シオフキは平均45.1㎜・最大54.3㎜、アサリは平均44.5㎜・最大48.5㎜といずれも大きく（第５表）、貝類採取活動が低調な時期に、大きな個体を選んで採取したものと推定される。既存の都川水系の分析例からみると、本調査区で遺物の主体を占める縄文時代中期後葉から後期前葉のデータには整合しない。二枚貝のサイズはこれほど大きい事例は知られておらず、また、イボキサゴが突出せず、かご等を用いたイボキサゴ漁によって必ず混じるウミニナ類・アラムシロもみられない。戦国時代の16世紀以降はハマグリが減少しシオフキやアサリが上回る傾向がみられる。データは古墳時代後期以降から平安時代のデータに調和する。奈良・平安時代にも縄文時代の小竪穴に類似する土坑が多数知られているので、この時期の蓋然性が高いと言える。

第３表　貝類種名

腹足綱	原始腹足目	ニシキウズガイ科	イボキサゴ	*Umbonium (Suchium) moniliferum*
	中腹足目	タマガイ科	ツメタガイ	*Glassaulax didyma*
	新腹足目	アクキガイ科	アカニシ	*Rapana venosa*
二枚貝綱	マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキ	*Mactra quadrangularis*
		マルスダレガイ科	ハマグリ	*Meretrix lusoria*
			アサリ	*Ruditapes philippinarum*
			オキシジミ	*Cyclina sinensis*
	計	５科	７種	

第４表　貝種組成

種名	個体数	%
ハマグリ	181	50.8%
イボキサゴ	78	21.9%
シオフキ	77	21.6%
アサリ	10	2.8%
アカニシ	7	2.0%
オキシジミ	2	0.6%
ツメタガイ	1	0.3%
合計	356	100%
水洗前体積（ℓ）	18.5	
微小貝	204	

第５表　計測値分布　二枚貝殻長

㎜	ハマグリ	シオフキ	アサリ
−30.0			
−35.0	1		1
−40.0	5	2	
−45.0	6	22	
−50.0	15	23	4
−55.0	15	4	
−60.0	23		
−65.0	13		
−70.0	4		
−75.0			
−80.0			
試料数	83	51	5
平均	53.8	45.1	44.5
標準偏差	8.2	3.1	5.4

第４章　うならすず遺跡の調査成果　－まとめに変えて－

１．調査成果

うならすず遺跡では、平成２～７・12年度に発掘調査が行われ、縄文時代中期末の加曽利EⅣ式～後期前葉の堀之内１式と古墳時代・平安時代の集落の存在が明らかになっている。

本調査区は平成12年調査地点からは西側に位置しており、台地縁辺部に該当する。本調査で検出した遺構は、縄文時代中期～後期の竪穴建物跡１軒(内部ピット10)、屋外炉１基、土坑18基、ピット11基で計31基を確認した他、古代～中世と思われる遺構は溝跡１条、土坑３基の計４基である。出土遺物は縄文時代中期から後期を主体としており、古代から中世に属する遺物はごくわずかである。ここでは、過去の調査を踏まえて調査成果を概観・検討しまとめとする。

２．遺構について

・１号竪穴建物跡の上面は大きく削平されており、ローム層直上での確認となっている。そのため、平成12年度調査と同様に柱穴と炉の配置から竪穴建物跡として判断している。

　包含層としたＣ３・Ｃ４グリッドからは大量の遺物が出土している。また、調査時に屋外炉と考えた33号遺構と内部に被熱範囲のある47号遺構が隣接していることから、本来は竪穴建物跡が存在していた可能性がある。

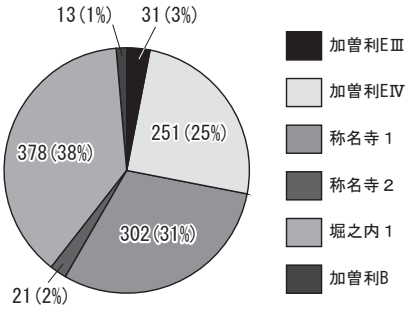
・30号遺構（溝跡）は詳細な時期は不明だが、概ね東西方向に走る溝である。平成12年調査で確認された溝跡は、北西～南東の直線的な１条と、北西～南東・北東～南西に屈曲した１条の計２条が確認されている。平面形が直線的であることや幅も類似していることから、接続はしていないが集落の区画や土地利用の境界などに関連する遺構の可能性がある。詳細については今後の周辺調査による事例の増加が待たれる。

・28号遺構上層、31号遺構下層に該当する層序の境目に貝がレンズ状に堆積している状況を確認した。28号遺構埋没時に窪みに廃棄されたものと考えられる。出土した貝については、調査区壁面際での出土であったことから位置を記録し一括で取り上げている。詳細については第３章で報告しているので参照されたい。分析・同定結果によれば、これまでの縄文貝塚の組成とは異なっており、古代の組成に近似している。上面の削平が著しいために明らかではないが、周辺の古墳時代から古代の集落との関連が窺われる。

３．遺物について

・本調査で主体を占める縄文土器は、中期～後期となっている。古代と思われる27号遺構から早期・稲荷台式、後期・加曽利B式が出土しているが、これは遺構の年代から流れ込みと考えられる。また、Ｃ３、Ｃ４グリッド包含層からは、Ｃ３で799点、Ｃ４で1188点とまとまった分布が見られ、草創期の平坂式、早期の夏島式・井草式、Ｄ２グリッド包含層からは早期の稲荷台式が出土している。本調査での縄文土器の組成・比率は以下の通りとなっている。

時期・形式	点数	割合	時期・形式	点数	割合
縄文中～後期:	2002	61.5％	加曽利EⅣ:	251	7.7％
堀之内１:	378	11.6％	加曽利EⅢ:	31	1.0％
称名寺１:	302	9.3％	称名寺２:	21	0.6％
縄文後期:	257	7.9％	加曽利Ｂ:	13	0.4％



中～後期としたものを除けば、後期前葉の堀之内１式が38％、後期初頭の称名寺１式が31％、中期末の加曽利ＥⅣ式が25％を占める。仮に中～後期が形式分類できる破片だとしてもこの比率に大きな動きはないものと考えられる。

古墳時代から古代の遺物としては、土師器４点、須恵器１点が出土している。土師器のうち、Ｃ４グリッドから出土の第17図79は墨書がみられるが判読は不明である。本調査地点の周辺には古墳時代から古代の集落が広がっており、そこからの流れ込みと推測される。

・その他：石棒の流通拠点、石器の製作地点として

本調査での石器の出土総数は、35号遺構から石棒破片１点、Ｃ３グリッドから石鏃１点（第16図65)、打製石斧１点（第17図64)、Ｃ４グリッドから磨石１点、砥石１点、凹石１点の計６点である。過年度調査では石棒が一定量出土しており、石棒の流通拠点と推定されている。本調査地点では石棒は35号遺構から破片１点のみであり、流通拠点として扱うのは難しい。また、出土遺物のなかでも石器の比率は低い。過去の調査事例では石鏃製作に伴う剥片・砕片が出土していることから、チップなどの集中地点は土壌サンプルを採取も考えていたが、そのような地点も見られなかった。

４．うならすず遺跡と周辺遺跡

本調査の規模は斜面部ということもあり、集落の全容を述べられるものではないが周辺遺跡との関係について触れておきたい。

すでに述べてきたように今回のうならすず遺跡は縄文時代中期末から後期初頭、加曽利ＥⅣ～堀之内式を主体とした遺構・遺物を確認している。周辺の調査成果に比してこれ以外の時期の遺物が少ないが、これは霊園造成の際に上面が削平された結果と考えられる。

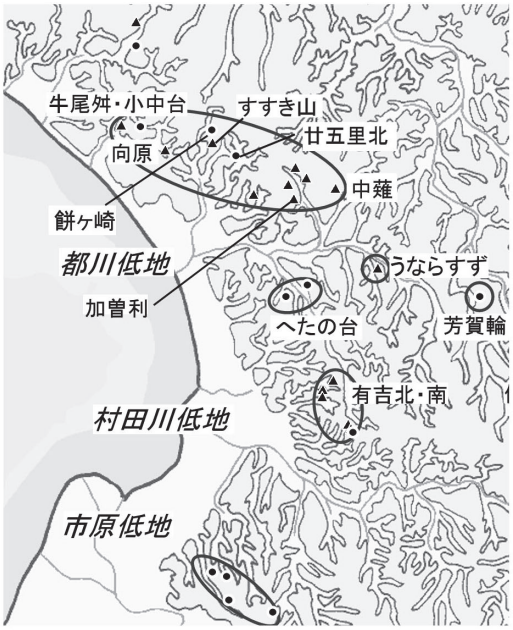
うならすず遺跡の過年度調査では、縄文時代の住居跡群は平成２年度調査区 (中期加曽利Ｅ式期の住居跡が30軒検出)と平成３年度調査区 (中期加曽利Ｅ式期～後期にかけての住居跡が20軒検出) に密集することがわかっている。平成６・７年度調査区は平成３年度調査区と隣接しており、時期的に後期が主体となるようである。これらの調査区は遺構の密集度は極めて密であり、未調査区域である同一台地平坦部にも集落跡が広く展開すると予想されている。平成３・６・７年度調査の結果では、小谷の縁辺部、西向の緩斜面の北側から東側に沿って遺構の展開が見られており、平成12年度調査区は同一台地上の平坦部に位置している。平成12年度調査区と平成３年度調査区はいずみ霊園墓地を南北に挟んでおり、調査区が隣接しているわけではないが、検討の結果からは同一集落であることが推測されている。

これらの調査区で検出された住居跡は中期加曽利Ｅ式期の住居跡もあるが、中期末～後期初頭・後期

a 加曽利ＥⅡ

大型貝塚＝大規模集落１つないし２つと複数の中・小規模集落が単位集落群をなし、それが集まって広域貝塚・集落群をつくる。

b 加曽利ＥⅢ



中期大型貝塚はすべてなくなる。加曽利 EⅡ式期の大規模集落のあった場所を避け、その周辺中心に中・小規模集落が点在する。中規模集落では貝採取が活発だが遺構外の大きな貝層は形成されない。

c 加曽利ＥⅣ・称名寺Ⅰ

集落分布は広域に分散。中期大型貝塚があった場所よりも集落の規模が大きくなる。貝類の利用も活発だが遺構外に大きな貝層は形成されない。後期大型貝塚の多くはこの時期から集落が形成されるが、称名寺２式期に連続しない。

d 堀之内１

後期大型貝塚＝大規模集落が広域貝塚・集落群をつくる。大半はｂの中期大型貝塚とは別の場所が選ばれている。

『千葉市餅ヶ崎遺跡』より加筆・転載

第19図　集落分布の変化

前葉の住居跡の割合が高い。しかし本調査区南端に接する平成３年度調査区の屈曲部付近に展開する住居跡は、中期加曽利Ｅ式期が主体であることがわかっており、時期により居住域の移動が考えられるものの、集落自体は連綿と続いていたものと考えられる。

うならすず遺跡周辺における加曽利ＥⅡ式期～堀之内式期の集落分布の変遷をみると第19図(餅ヶ崎遺跡2019より転載)のようになる。県内で特に加曽利EⅣ式から称名寺式期の住居跡を多数検出した遺跡を挙げると、成田市長田雉子ヶ原遺跡(57軒)、千葉市餅ヶ崎遺跡(54軒)、千葉市うならすず遺跡(37軒)、市原市武士遺跡(27軒)、市川市権現原遺跡(23軒)、千葉市愛生遺跡(19軒)、香取市多田遺跡(12軒)などがある。このうち餅ヶ崎遺跡の54軒と長田雉子ヶ原遺跡の57軒は突出しており双璧といえる。今回調査のうならすず遺跡と愛生遺跡は同じ都川水系にあり、特に愛生遺跡は餅ヶ崎遺跡と同一台地上に隣接する関係の深い遺跡である。うならすず遺跡、餅ヶ崎遺跡、愛生遺跡の3遺跡は、①加曽利EⅣ式～称名寺式期以外の住居が少ない、②貝層の形成が活発、③石棒が多いという共通点がみられる。今回のうならすず遺跡調査では②の貝層の形成と③の石棒数の多さという点は確認できなかった。これは今回調査地点が集落域と台地の端部に位置していることに起因するものと考えられる。

最後に本遺跡の南側に存在する多部田貝塚についても触れておきたい。多部田貝塚は主に後期加曽利Ｂ式期に形成された貝塚であると考えられている。 平成10・11 年度調査では中期加曽利ＥⅣ式・後期堀之内式・加曽利Ｂ式・安行式の土器が出土している。特に大規模馬蹄形貝塚を形成した縄文人の居住域・生活域・環境復元など、広域での検証を行うことが可能な条件を有しており、その北端部を形成するうならすず遺跡との関係は緊密なものであろう。今後、多部田貝塚をはじめとする周辺遺跡の調査成果の増加により、中期から後期集落の検討が進むことが期待される。

参考文献

市立市川考古博物館1992『堀之内貝塚資料図譜』市川市立考古博物館研究調査報告第5冊

大川清・鈴木公雄・工楽善通1996『日本土器辞典』雄山閣

株式会社アーネストワン・財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター2009『大森第1遺跡―平成20年度―』

株式会社地域文化財研究所2019『千葉市古山遺跡（第4次）―集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書―』千葉市教育委員会

加納実1994「加曽利 EⅢ・Ⅳ式土器の系統分析」貝塚博物館紀要21、千葉市立加曽利貝塚博物館

加納実1995「下総台地における加曽利 EⅢ式期の諸問題－集落の成立に関する予察を中心に－」研究紀要16、千葉県文化財センター

小林達雄2008『総覧　縄文土器』（株）アム・プロモーション

宗教法人最福寺・財団法人千葉市文化財調査協会2001『千葉市うならすず遺跡』

田中英世・簗瀬裕一他1988『千葉市餅ヶ崎遺跡　昭和60年度発掘調査報告書』千葉市文化財調査協会

田中英世・中山貴正 2003『千葉市平和公園遺跡群Ⅰ　多部田貝塚　貝殻塚遺跡　ムグリ遺跡』千葉市教育委員会

田中英世・古谷渉2004『千葉市平和公園遺跡群Ⅱ　うならすず遺跡』千葉市教育委員会

谷藤保彦・関根慎二1999『縄文土器論集』―縄文セミナー10周年記念論文集―六一書房

玉田芳英2007『日本の美術498（縄文土器　後期）』

千葉市史編纂委員会 1976『千葉市史・資料篇－原始・古代・中世－』

西野雅人・尾崎沙羅2019『千葉市餅ヶ崎遺跡－千葉市動物公園第Ⅰ期工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』千葉市教育委員会

写真図版

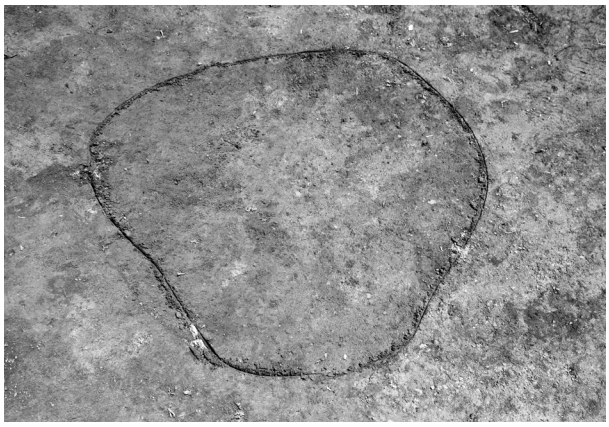
完掘全景（北東から）

完掘全景（北西から）

図版２

基本層序（南から）

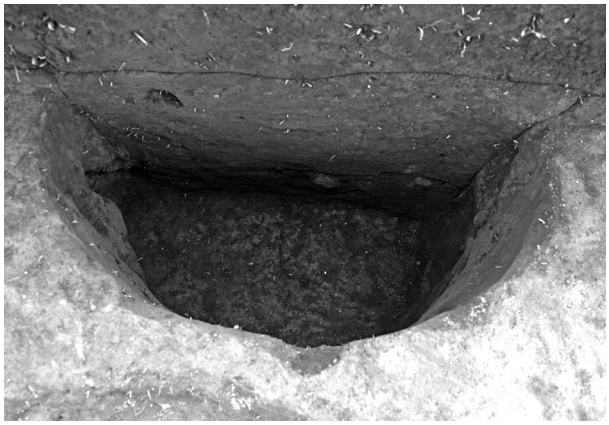
１号竪穴建物跡完掘（西から）



17号遺構検出状況（西から）

17号遺構断面（南西から）

17号遺構完掘（西から）

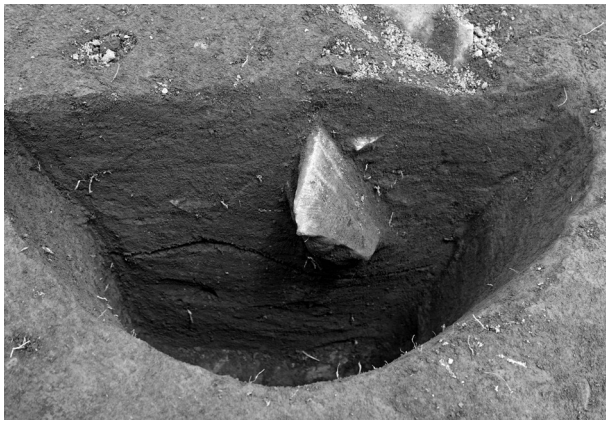


６号遺構完掘（東から）

２・48号遺構完掘（北から）

７～11号遺構完掘（北西から）

37号遺構完掘（南から）



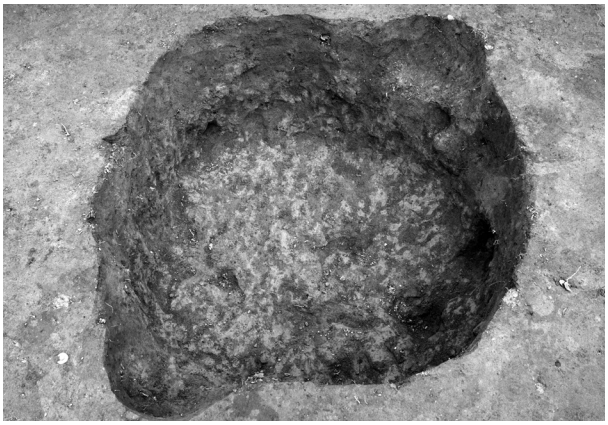
38号遺構土層断面（南西から）

図版４

38号遺構遺物出土状況（南西から）

47号遺構断面(北から）

26号遺構断面（南西から）



26号遺構完掘（西から）

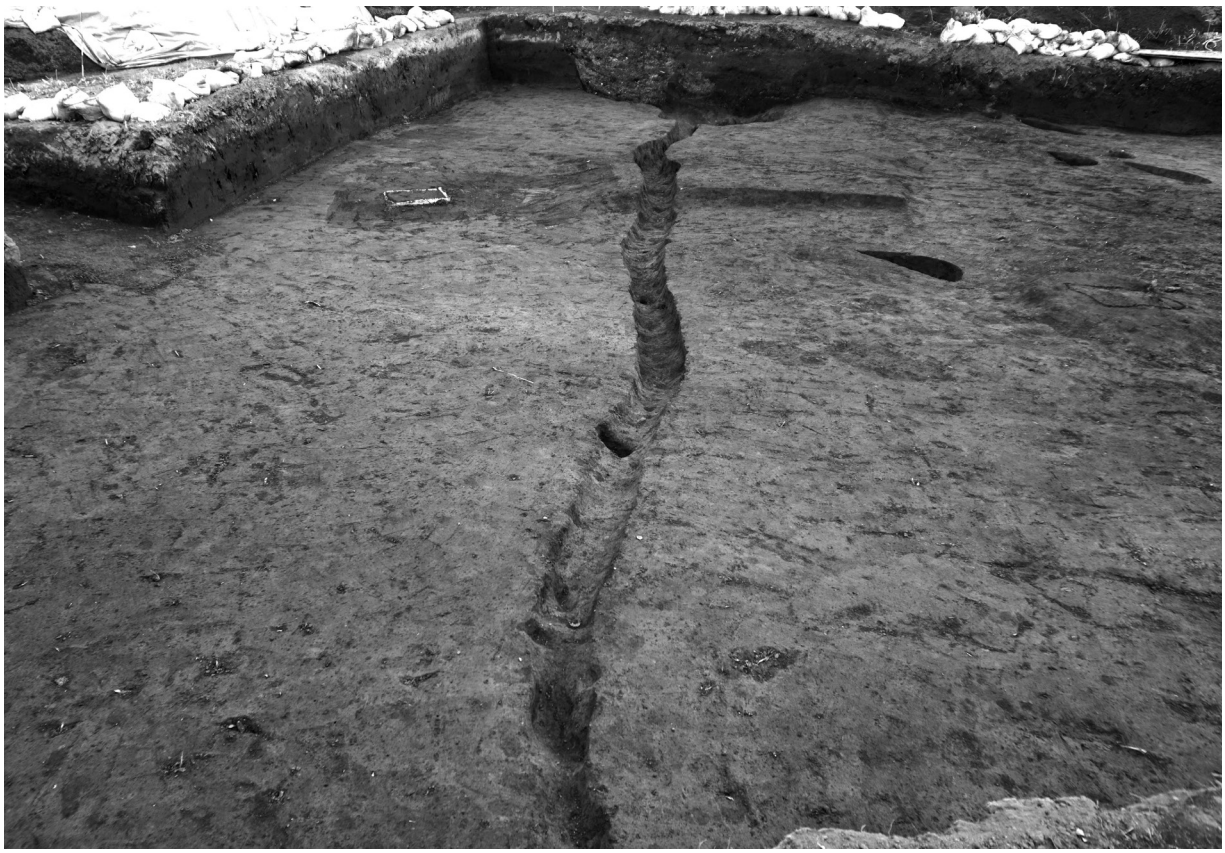
33号遺構検出状況（西から）

33号遺構断面（東から）

28号遺構貝出土状況（東から）

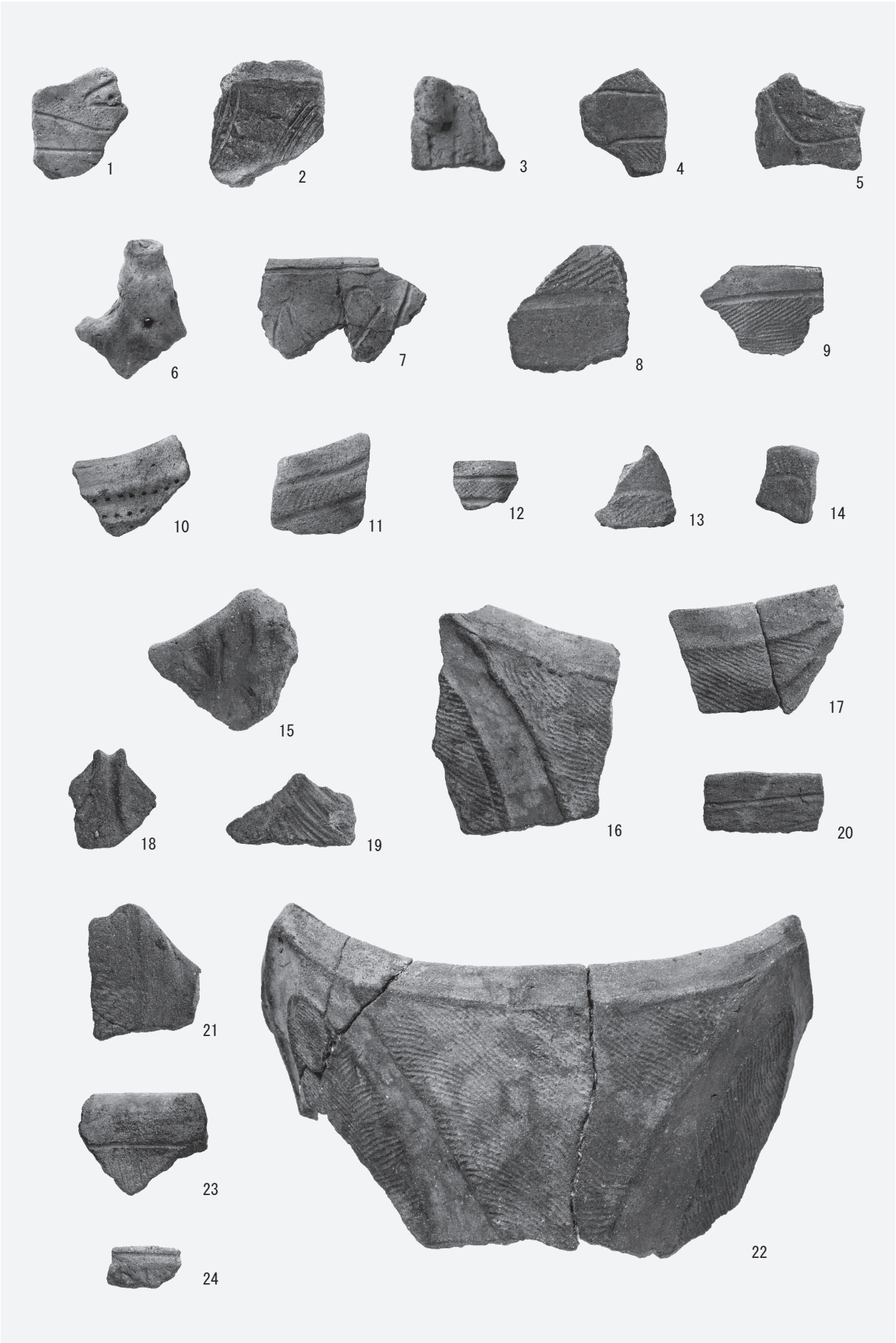
包含層遺物出土状況（東から）

27・28・31号遺構完掘（東から）

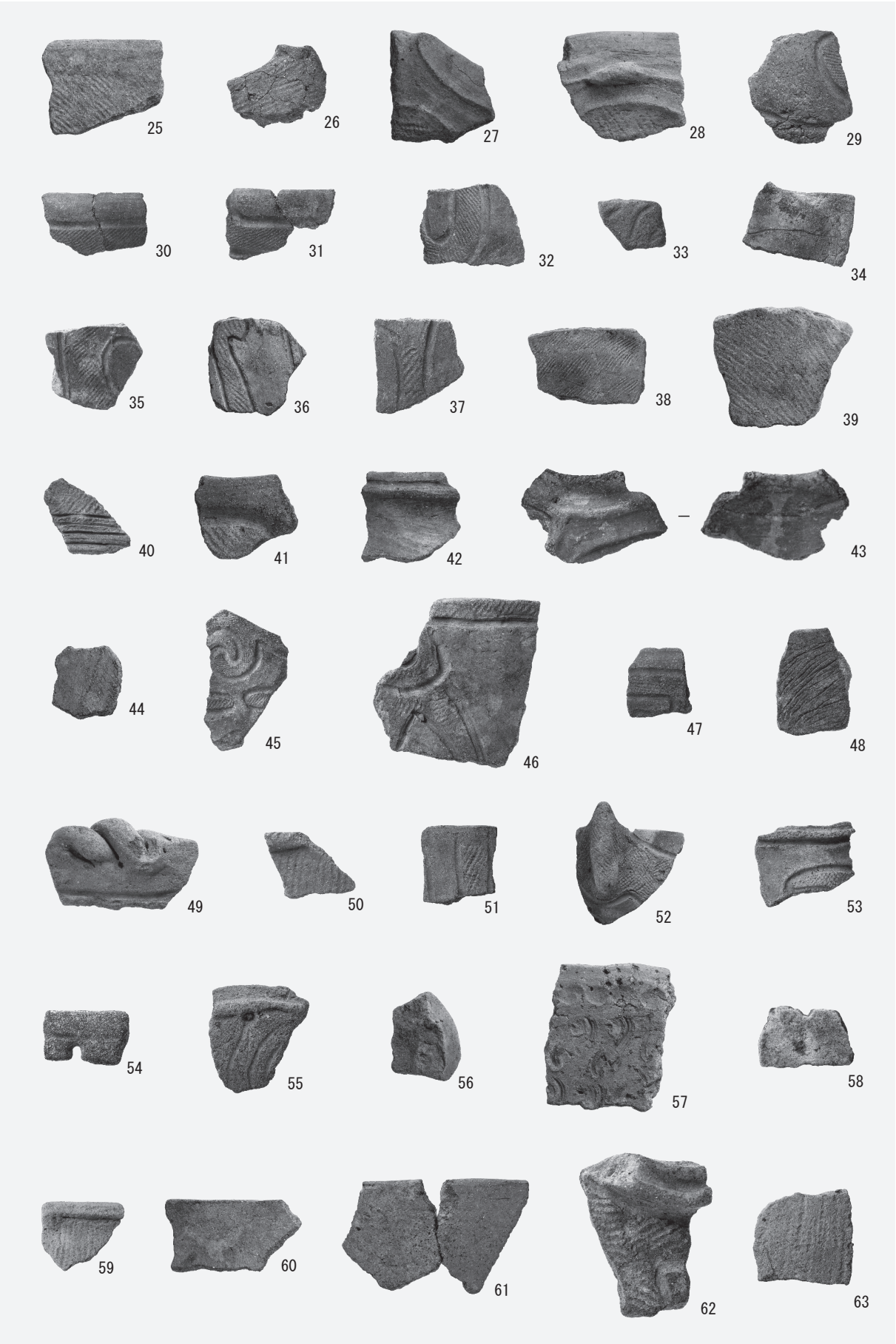


30号遺構完掘（西から）

図版６

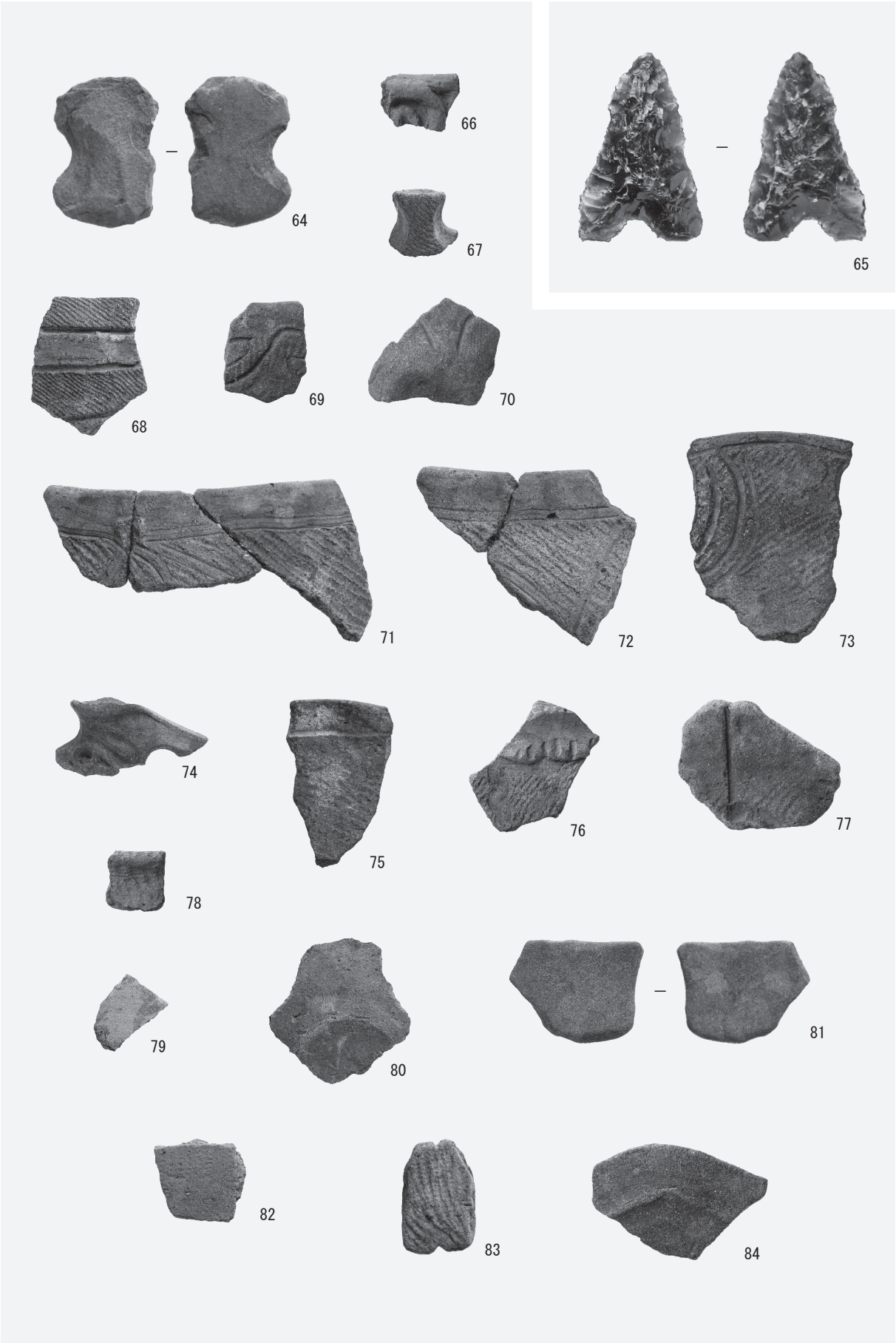


出土遺物１


25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63

出土遺物２

図版８



出土遺物３

出土遺物４

報告書抄録

ふ り が な	ちばしうならすずいせき
書　　名	千葉市うならすず遺跡
副　書　名	－墓地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	西野雅人・井出祥子・小野麻人・青木　誠・濱村友美・堀江夏歩
編 集 機 関	株式会社イビソク　千葉営業所
所　在　地	〒273-0033　千葉県船橋市本郷町405　203号　TEL：047-374-3287
発行年月日	令和２年６月５日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
うならすず遺跡	千葉県千葉市若葉区多部田町1175、1176-1の各一部	12104	3206	35°35′51″	140°11′51″	20190415～20190511	200㎡	墓地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
うならすず遺跡	集落	縄文時代中期～後期	竪穴建物跡１軒 土坑18基、 ピット11基、	縄文土器 石器	縄文時代中期～後期 加曽利ＥⅢ式～堀之内式期の集落
		古代～中世	屋外炉１基、 溝跡１条、 土坑３基	土師器 貝	

要　　約	本遺跡は縄文時代中期～後期、加曽利ＥⅢ式～堀之内式期を主とする集落であり、隣接する平成12年度調査の集落と一体をなすと考えられる。竪穴建物跡の床面などの残存状況は悪いが、炉や柱穴の残存が確認できた。また、古代から中世とみられる貝の堆積も出土している。周辺の過去の調査からも、本来は縄文時代中期～後期と古代～中世の２時期の集落が存在していたものと推定される。

千葉市うならすず遺跡
－墓地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

令和２年６月５日

編集・発行　株式会社イビソク　千葉営業所
〒273-0033　千葉県船橋市本郷町405　203号
TEL：047-374-3287　FAX：047-374-3288
印　　刷　冨士出版印刷株式会社